
こんにちは赤ちゃん

いときりばさみ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

こんにちは赤ちゃん

【コード】

N2297Q

【作者名】

いときりばさみ

【あらすじ】

とある大学病院で働く看護師、さなおかあきら笹岡明。
彼にはある秘密があった。

それは、赤ちゃんの『想い』が『声』として聞こえてしまうこと。

そんな笹岡の、新たな配属先はなんと、新生児集中治療室（NICU）。

赤ちゃんの『声』だらけのNICUで、笹岡は、ちゃんと仕事に集中できるのか？

赤ちゃんの『声』だらけのNICUで、笹岡は、怪しまれずに仕事をすることができるのか？

赤ちゃんだらけのNICUで、笹岡に彼女はできるのか？

そして今日も、赤ちゃんたちから次々と繰り広げられる『ボケ』への、笹岡のツッコミが炸裂する！……心の中で。

フォレストノベルという携帯小説サイトに投稿しているものを、加筆修正しております。

怪しいものではありません。

『声』が聞こえる（前書き）

某携帯小説サイトで執筆しているものを、加筆修正しております。

『声』が聞こえる

その扉を開けた瞬間……。

『なんか、変なのが来た!』

『何だ、あいつ!』

『不審者だ!』

『不審者だ!』

俺は不審者に認定された。

ちなみに、誤解のないように言っておくが、俺は、今日からここに配属になっただけで、決して不審者ではない。

「あら?どうしたのかしら?」

年配の女性が現れた。

奴らの『声』に気付いたのだろうか?

「あら、早めに来てくれたのね、ありがとう。どうぞやら、そうでもないのかもしれない。」

『あ、シャツチヨー、不審者だよ!』

『いや、なんか知ってるっぽいよ!』

『シャツチヨー、あれ、誰?』

『愛人?』

『恋人?』

『変人?』

『シャツチヨー、おむつ替えて!』

『あいつ、きつと、パシリだよ!』

『そうか、パシリか!』

『じゃあ、パシリでも何でもいいからおむつ替えて!』

『変人で、パシリなんだよ!』

『変態パシリ、おむつ替えて!』

好き勝手言ってくれやがって……。

「今日は、みんな状態もいいし、おとなしいから助かるわ。」

俺には、皆、とても騒がしいように思える。

……ということは、やっぱりこの人にも聞こえてないんだな。

ここは、病気で生まれたりした赤ちゃんが入院する、新生児集中治療室、通称NICU。

つまり、ここに入院していて、さっきからうるさいあいつらは、全員赤ちゃんなのだ。

ナースステーションにも人の気配を感じるが、誰一人としてベビーの『声』の騒がしさに気付いている様子はなかった。

ここなら、俺以外にも、聞こえる人がいるんじゃないかと、少しだけ期待していたが、やはり、そうではないようだ。

俺には、赤ちゃんの、『想い』が、『声』として、聞こえてしま
うのだ。

「皆に紹介するから、ついてきて。」

「はい!」

『おーい、パシリ!おむつは?』

ごめんね、怪しまれるといけないから、君の『声』に、反応するわけにはいかないんだ。

『しまったー！外に出てくるの早まった！羊水が恋しい！』

少し離れていても、奴らの『声』は、聞こえてくる。

『ん……おはよう。』

『あ、さやかちゃん、おはよう！』

『見て見て、あそこ、不審者なんだよ！』

『違うよ！パシリだよ！』

『違うよ！変態だよ！』

……本当に、嫌でも、聞こえてくる。

『え？新しい看護師じゃないの？あの服装。』

さやかちゃんとやらは、どうやらわかってくれたらしい。

『そういえば、白いの着てるね。』

『白いの着てれば多少は看護師っぽく見えるね。』

『マゴにも衣装ってやつか？』

『僕おじいちゃんじゃないよ！』

『私も、おじいちゃんじゃないよ！』

『えーっ、でも、怪しいって。』

『白いの着てるだけでただの不審者かもしれないよ！』

『白いの着るのが趣味かもしれないよ！』

『じゃあ、変態だ！』

『変態！おむつ替えて！』

どうやら俺は変態ということ、意見がまとまってしまったらしい。

すごく、不本意だ。

「皆！今日からこの配属になった人を紹介するから、ちょっと集

「まっつて！」

看護師長がそう言うと、看護師たちが集まってきた。

『ね？だから言ったでしょ！』

『さやかちゃんすごい！』

『さやかちゃんすごい！』

『さやかちゃん、すごい！』

『山口、あんた、さっきまで寝てたから知らないでしょ！』

『あれ？ばれちゃった？』

相変わらず、ベビーたちは、自由に『発言』している。

「今日からNICUの配属になった、なつかあかあか笹岡明君よ。」

「よろしくお願いします。」

『あいつ、ささおか、だつて。』

『ささおか、オムツ！』

『ささおか、ミルク！』

『ささおか、ミルク、こつちも！』

『ささおか、こつちは羊水！』

『ささおか、この管、外して！』

『山口、それは、外すとヤバイよ。』

『ん？なんだ？騒がしいな。』

『あ、荘ちゃん！あいつ、不審者！』

『違うよ！パシリだよ！』

『違うよ！変態だよ！』

『……新しい看護師、笹岡って言うんだって。』

『ふーん、新入りか、よろしくな！……って、聞こえてないだろうけどな。』

すごい、なんだか、荘ちゃんとやら、0歳児にして、重鎮の風格

が漂ってる。

実は、聞こえているのだが、俺は、全く聞こえていないふりをしていた。

俺は、知っているから。

『声』なんて非科学的なもの、誰も、信じるはずがないということ。

嘘をついていると思われるか、頭がおかしいと思われるか……。いずれにしても、信用などされるはずがない。

人事異動でNICUの配属になると知った時から、俺は決意していた。

『声』が、聞こえるということは、隠し通す、隠し通してみせると。

簡単なオリエンテーションがあった後、再び、ベビーたちと対面した。

『あ、笹岡だ！』

『笹岡だ！』

『笹岡、ママ連れてきて！』

『笹岡、羊水はまだか！』

『笹岡、オムツ替えて！』

『笹岡、彼女いるの？』

『あの顔は、いないと思うよ。』

ピンポーン！

大正解！……って、そうだけど、そうじゃなくて……。

ものすごく空気を読んだようなタイミングでインターホンの音がした。

一斉にベビーたちの『声』は、静まり返った。
全員の耳が、次に続く音を聞き漏らすまいと、集中しているようだった。

「佐倉です。」
若い女性の声でした。

『あ、ママだ！ママの声だ！ママ！ママ……』
ベビーの一人が、騒ぎだした。

面会時間が始まったようだ。

『ママー！』
『パパー！』
『ママが来ないよー！』
『じいじー！』
『ばあばー！』
『誰か来てー！』
『誰でもいいけどママ、来てー！』

家族が面会に来たベビーは、喜びの『声』を上げ、面会に来ていないベビーは、寂しそうな『声』をあげた。

そんな中、一人だけ、おとなしいベビーがいた。

「莊ちゃんこと、重鎮、中山莊太だ。」
なかやまそつた

眠っているのだろうか？

そつと、そちらへと歩み寄った。

『同情かよ？』

莊太は、目を瞑っていただけで、眠ってなどいなかった。

「莊太君、お利口さんだね。」

家族が来ない他のベビーたちが騒いでいる中、一人、現実を受け止めて大人しくしてられる莊太は、本当に、賢いように思えた。

『お利口さん？笑わせるなよ。』

あれ？何だかすね始めたぞ？

『本当に、お利口さんだったら、俺は……！』

莊太の呼吸が荒くなり、モニターの波形が乱れ始めた。

「おい、大丈夫か？莊太！」

「キヤー！莊ちゃん！」

モニターの警告アラームに気付いた先輩看護師が駆けつけてきた。

先輩看護師の迅速な対応により、莊太は事なきを得た。

「最近落ち着いてただけだね。」

その原因が自分かもしれないとは言い出せないまま、俺は、先輩看護師の指示にしたがって、そのまま荘太の様子を見ることになった。

「荘太君、落ち着いたみたいでよかったよ。」

『見苦しいものを見せちまったな、新入り。』

何だか、俺、さっきまで体調の悪かった0歳児に気遣われてる…

…。

こいつは、本当に、0歳児なのだろうか？

『そつえば笹岡、』

ふいに名前を呼ばれて、俺は思わず顔を上げた。

『その、荘太君って呼び方、気持ち悪い！』

き、きもっ……！

ここで反撃したらバレル！

でも、やられっぱなしっていうのも何だか癪だ。

ニヤリとこちらを見つめる荘太に俺もニヤリと微笑み返しながらかた話しかけた。

「あれ？そんなに嬉しそうな顔して、お兄ちゃんに構ってほしいのかな？そ・う・ちゃん！」

荘太の顔がわずかに歪むよりも早く、

「笹岡くんきもーい！」

先輩看護師たちの迅速なツッコミを食らってしまった。

荘太は嬉しそうに微笑んだ。

こいつめ！

「荘ちゃんはキモいらしいから、これからは荘太って呼ぶぞ！」

『その方がしっくりくる。』

荘太の言葉を受けて、俺は思わず頷いた。

『ところで笹岡、』

荘太は、真面目な顔をした。

『お前、俺たちの『声』、聞こえてるだろ？』

バレた！

初日にして、バレた！

こうして俺とベビーたちとの、NICUでの日々が、幕を開けたのだった。

儂い約束

俺がNICUの配属になって二日目。

「全員、集合！」

朝から空気が張りつめていると感じるのは、昨日は休みでいなかった、この主任がいるからかもしれない。

「今日、新人研修でここに来る新人に二人ほど、問題児がいるらしいんだが、誰か聞いているか？」

朝から空気が張りつめていると感じるのは、今日ここに、問題児が来るからに違いない。

「オペ室で、清潔のものを素手で触ったそうですよ。」

「何？よし、触られて困るものは、全部隠せ！」

主任は、主任というよりも、隊長といったほうがしっくりくるような人柄だ。

「病棟で、何百万もする機械を勝手に触って壊したらしいです。」

「何だと！山口ベビーは機械ごと一番奥に隠せ！って、もう一番奥にいるじゃないか！」

山口ベビーは、NICUで、一番状態が悪いため、一番たくさんの高価な機械につながれているのだ。

「こうなったら仕方ない、その新人り、そうそう、笹岡！お前は、そこで山口ベビーちゃんを見張ってる！」

「はい！」

……危ない、思わず敬礼するところだった。

「あの、主任……」

「すごく、申し訳なさそうに、小さな声で一人の看護師が話しかけた。」

「どうした？言ってみろ。」

「病室の空きベッドで爆睡してたそうです。」

「はっ！できるもんならやってみやがれ！保育器に押し込んでやる！」

朝の業務の引き継ぎが終わり、俺は、主任に言われた持ち場についた。

『今日は、笹岡は、私の担当なの？』

自分の身に危険が及ぶかもしれないことに気付いていないのか、山口ベビーはけろりとしている。

「今日はお姫様を守らなきゃいけないから、ここにいるんだよ。保育器越しに、山口ベビーを見ながら、そう言った。」

『今日、ここに、お姫様が来るの？楽しみ！』

……何だか、勘違いされた。

どう言って、誤解を解こうか。

『違う違う、今日、悪魔みたいなやつが来るから、そいつらから山口を守ってくれるんだってさ。』

山口ベビーの隣のベッドの佐倉ベビーが助け舟を出してくれた。

『うわあ、たのもしー!』

「そつかそつか、頼もしいか!」

「笹岡君、何、都合よく山口ちゃんのセリフ捏造してるの?」

先輩看護師にそう言われて、ここにいる、俺以外の大人は全員、

『声』が聞こえなかったことを思い出した。

怪しまれないよう、気を付けなければ。

『莊ちゃんから聞いたんだけどね、』

山口ベビーが嬉しそうに話しかけてきた。

『笹岡って、私たちの『声』、聞こえるんだよね?』

俺がうなずくと、すかさず佐倉ベビーが、

『そうみただよ。』

と、山口ベビーに教えていた。

佐倉ベビーは、0歳児にせずいふんと面倒見がよい子だと、感心した。

『じゃあさ、笹岡、私もまだまだここに来たばかりだけど、笹岡はもつとここに来たばかりだから、私がいると教えてあげるね!』

俺は、再びうなずいた。

『でも、その前に、』

山口ベビーがもそもぞしだした。

『オムツ、替えて。』

「お?オムツか?任せとけ!」

『ありがとう。』

こんなに楽な仕事で、給料をもらってしまつてよいものか、考え
てしまうほどに、今日は何もしていない。

俺は、のんきに、山口ベビーの話を聞いていた。

山口ベビーは、一生懸命、皆の話を聞かせてくれた。

『シャツチヨーはね、本当は、看護師長っていうみたいなんだけど

……』

『莊ちゃんはね、この中で一番お兄さんでね、ホントはすごく面倒
見がよくてね……』

『皆ね、主任さんのことを隊長と呼ぶんだよ……』

『さやかちゃんは、いつもみんなのムードメーカーでね……』

今、この病棟の中で、一番状態が悪くて、一番、自分のことに一
生懸命でいるべき小さな命は、その小さな体で一生懸命生きながら、
一生懸命周りのみんなのことを考えていた。

今の自分で精いっぱい自分が、少し、恥ずかしくなった。

『最後にね、佐倉君はね、』

山口ベビーが、看護師も含め、NICUのメンバー全員の話をは
とんどし終え、最後に佐倉ベビーの話をしようとした時だった。

奴らが、問題児が、襲来した。

「うわー、小さいーい！かわいいーい！」

口々に叫びながら、二人の若い看護師がダツシュしてきた。

あの、見学に来た学生じゃないんだから、落ち着きましょうね。

ていうか、走ったら、ほこりが立ちますから。

ていうか、あの、手洗い場、無視してきましたよね。

ていうか、消毒とか、無視してきましたよね。

ていうか、ガウンとか、無視してきましたよね。

ていうか、キャップとか、無視してきましたよね。

「あのね、君たち……」

これは、ジエネレーションギャップとやらなのだろうか？

俺が、小姑的な考えを持ってしまっただけなのだろうか？

様々な憶測をしながらも、声をかけた俺を無視して、突き進む、

二人組。

「あ、でもさ、あれとか、グロくない？」

二人組の、片方が、しっかりと、山口ベビーを指さしながら、そう言った。

「ホント、きもーい！」

もう片方も、その言葉に同意した。

「自分たちがお母さんのお腹にいるときだって、この子と変わらな
いじゃないか！」

俺は、思わず反論した。

「うわー、オジサン、説教ですか？」

「マジっざいんですけど。」

あの、オジサン、ウザいって言われたんで、へこんでもいいですか？

「ていうか、あんな風に生まれてくるくらいなら、死んだほうがましだし。」

「あはは、言ってる!」

こいつら、何てこと……!

パァン!パァン!

ものすごくいい音がして、問題児二人は、左頬を押さえながら、俺……

の、隣に立っている主任を睨んでいた。

「お前ら!一生懸命生きている命に対して、死んだほうがましとは何事だ!表へ出る!」

「ちょ、イタ……」

「何すんの、オバサン!」

問題児二人は、耳を引っ張られるという実に古典的な方法で、外へと連れ出されていった。

全員が、静まり返った。

『笹岡、ありがとう。』

静寂を破ったのは、山口ベビーの『声』だった。

その声は、機械の音に、かき消されてしまいそうなほど、小さな、小さな『声』だった。

「俺も、主任みたいに言えたらカッコよかったんだけどな。俺は、努めて明るく答えた。」

『笹岡も、カッコよかったよ。』

そつと、山口ベビーがそう言った。

『隊長の方がもっとカッコよかったけどね!』

すかさず誰かが山口ベビーの『声』マネをして、ベビーたちは皆ニヤリと笑った。

『ホント、隊長、カッコよかったな!』

『何か、スカッとしたもんね!』

『山口、アイツラの言ったことなんか気にするなよ!』

『私だったら、往復ビンタをお見舞いしてやったわよ!』

『僕だったらおしっこかける!』

『………下品。』

『え?あ、はい、ごめんなさい。』

『……山口？』

『私って、』

山口ベビーの消え入りそうな『声』に、全員が集中し、NICUは、静まり返っていた。

『死んだ方がまし、なのかな？』

静かに扉が開く音がした。

「あのオバサン、マジうざいし！」

「マジ、ピアスちぎれるかと思ったし！」

この上なく、空気を読めていないタイミングで、問題児が舞い戻ってきた。

「赤ちゃんって、超癒される！」

赤ちゃんに癒されたいのなら、新生児集・中・治・療・室ではなく、産科病棟の新生児室に行ってくれ！

「あの子とか、超可愛くない？」

二人が迷わず駆け寄っていったのは、佐倉ベビーのところだった。佐倉ベビーは、人見知りしないし、顔も整っているし、あまり泣きわめいたりしない。

問題児め、意外と賢い選択をしゃがる。

二人の手が、佐倉ベビーに伸びようとしたその時だった。

「んぎゃあ、んぎゃあ……！」

普段は全くと言っていいほど泣かない佐倉ベビーが、今までにないくらいに大声で、泣きわめき始めた。

問題児二人は、とっさに後ずさりし、「何、この子！」など口々に言っていた。

俺と、ベビーたちには、佐倉ベビーの『想い』が『声』として、聞こえていた。

『お前らみたいな汚いやつに、触られてたまるかよ！』
確かに、手くらいは洗ってほしいものだ。

『山口は、一生懸命生きてるのに、死んだほうがましとか言う奴らに、触られてたまるかよ！』

あ、そっちか。

『お前ら、山口よりずっと生きてるくせに、山口みたいに毎日毎日、一生懸命生きたことあるのかよ？』

ずっと隣で見えてきたから、佐倉ベビーは知っていたんだ。

『お前ら、山口よりずっと生きてるくせに、山口みたいに、自分だっつてしんどいのに、周りのこと考えたことあるのかよ？』

山口ベビーは、一生懸命生きているっていうこと。

『山口はな、お前らなんかよりもずっとずっと、きれいなやつなんだ！お前らなんかに、山口を侮辱されてたまるかよ！』
だから、悔しかったんだ。

その、一生懸命を、否定されたことが。

普段穏やかな佐倉ベビーの激しい『怒り』の『声』に、ベビーたち全員が初めは驚いていた。
ところが、佐倉ベビーに触発されたかのように、全員が、大泣きし始めた。

『よくも私の親友に、ひどいこと言ってくれたわね、この、メスブタ！』

『メスブタ！』

『スブタ！』

『やっぱりおしっこぶっかけてやる！』

『その距離じゃ無理！』

『お前ら、顔洗って、手も洗って、出直してこいよ！帰れ！』

『そうだそうだ、ばっちいぞ、帰れ！』

『帰れ！』

『帰れ！』

泣き声の大合唱の裏側では、『帰れ』コールが巻き起こっていた。
ある意味、すごいチームワークだ。

そんな中、山口ベビー、一人だけが、ぼかんとしていた。

「あら、皆大泣きじゃない！どうしたの？って……お前ら！」
一瞬、ベビーたちの泣き声が止まったんじゃないかと思う程の怒声
が響き渡った。

「私たち、泣かせてませんけど何か？」

「その子達、勝手に泣いたんですよ。」

さつき怒声が響いたときに、一瞬たじろいでいたはずの問題児二人は、そのふてぶてしさを取り戻して言った。

その立ち直りの早さは、別のところで発揮してくれ。

主任は不意に、にっこりとほほ笑んだ。

「あなたたち、さつきは、お話の途中だったわよね。今からじっくり、お話ししましょう。さあ、いらっしやい。」

そして、主任は、問題児二人の腕を引っ張って、ナースステーションの奥に連れて行った。

『あいつら、ザマアミロだな。』

ぼそっと、荘太が言った。

「どういうことだ？」

誰もいないのをいいことに、俺は、とっさに聞き返した。

『あいつらが連れて行かれた先は、説教部屋だ。』
「説教部屋？」

『あの部屋に入ったものは、最低でも2時間は出てこない。』
長っ！

『そして、あの部屋で何があったのかは誰も口を割ったことがない。謎、かつ恐怖の部屋だ。』

その部屋に入ったものがどうなるかは、出てきたらわかる、と言われた。

いずれにせよ、今後、入室することがないよう気をつけたいところだ。

『隊長、キレてたし、今日は長いかもね。』

隊長、もとい主任は、キレているときほど静かに怒るらしい。気を付けておこう。

『みんな、』

ベビーたちの説教部屋トークが一段落したとき、山口ベビーが『声』を出した。

『みんな、ありがとう。』

皆の『想い』が伝わって、山口ベビーは少し、大きく、元気な『声』で言った。

『親友として当然のことをしたまですよ。』

『だって、あのメスブタ、汚いし。』

『だって、あのスブタ、許せなかったし。』

『おしっこ、かけてない！』

『いい加減、その発想から抜け出しなよ。』

『山口のことが大切なんだから、当然だよ。』

いつもの穏やかな口調に戻った佐倉ベビーが、照れくさそうに言

った。

山口ベビーは、『声』をひそめて言った。

『佐倉君、ありがとう。』

佐倉ベビーは、照れくさそうにしていた。

そして、山口ベビーは、俺にだけ聞こえるように小さな『声』で囁いた。

『佐倉君はね、私の、一番大好きな人なの。』

佐倉ベビーの退院が決まった。

『おめでとう。』

『元気だな。』

『ここには戻ってくるなよ。』

全員が口々に言った。

『佐倉君、』

隣のベッドの山口ベビーが、佐倉ベビーに小さな『声』で話しかけた。

『寂しいけど、すごく寂しいけど、でも、おめでとう。元気だね。』

『山口、いつか絶対迎えに行くから、それまでに、元気になるよ。』

『うん、元気になる。私、頑張るよ。』

佐倉ベビーは、少しだけ、『声』をひそめた。

『今日、僕、ママに名前を付けてもらったんだ。山口にだけ教えるよ。保、^{たもつ}佐倉保。覚えとけよ。』

『保。忘れないよ。私も今日、ママに名前つけてもらったの。紗代。^{さよ}』

山口紗代。忘れないでね。』

『紗代、絶対に、忘れない。』

『保君、私も絶対に、忘れない。』

俺は知っている。

保の父親が来月からカナダに転勤で、家族全員でカナダに行くことになっていてることを。

俺は知っている。

赤ちゃんは、自らの意思で声を発した時に、『声』と、『声』を発していたころの記憶を失うということ。

二人の距離は、遠く離れてしまう。

二人の記憶は失われてしまう。

それでも俺は、願わずにはいられない。

二人が再び出会える奇跡を。

二人が再び愛し合える運命を。

傳い約束（後書き）

本文に書けませんでしたが、問題児二人はその後、きれいさっぱり更生して出てきたそうです。

残念兄弟

俺がNICUの配属になってから一ヶ月経った。

この一ヶ月で、だいぶ仕事にも慣れてきた。

『ねえねえ紗代ちゃん!』

一ヶ月もすれば、NICUのメンバーにも若干変化があるわけで、今『声』を発したのは、一週間前に入院してきた鈴村ベビーである。

『なあに?』

眠りかかっていた紗代は、とろんとしながら答えた。

ちなみに紗代は、保が退院してからもずっとここに入院している。

『オレの彼女にならない?』

この告白を聞くのは、7度目だ。

『ごめんなさい、心に決めた人がいるから。』

そして、こうして振られるのを聞くのも、7度目だ。

保が退院前に、俺に『紗代に悪い虫を近寄らせるな』と言っていたけれども、保くん、君の想い人は、意外とガードが固いみたいだよ。

『オレさ、思ったんだけど、本当に心に決めた人、いるの?』

お、鈴村のやつ、今日は食い下がった!

『え、いるけど、その……。』

まだ、保のことを知っているベビーがいるからかもしれない、紗代は実名を挙げるのをためらっていた。

『ほら、本当はいないんだよ!』

鈴村よ、本当は心に決めた人がいないのに嘘つかれてるほうが残念だと思っぞ。

『あたし、知ってるわよ。紗代の好きな人。』

保のことを知っているベビーの一人、おませさんの平山さやかがそう言った。

『え?オレなんですよ?』

鈴村よ、今の流れでどうしてそんな展開になるんだい?

『違うにきまつてるでしょ。』

さすが、さやか。一刀両断だ。

『紗代が入院した時に隣のベッドにいた男の子でしょ!鈴村よりもずっとイケメンよ。』

『え?さやかちゃん、何で知って……』

『当たり前でしょ!親友歴一か月半をなめないでよね!』

短っ!だが、それが、彼女たちの人生のすべてなのだ。

『そ、そんなあ……』

ここで、へこんでいるのは、好きな人がばれた紗代ではなく、鈴村だ。

『なんだかんだ言っつて、実は嘘で、オレの彼女になりたかつたみたいなシンデレラストーリーを夢見てたのに……』

鈴村よ、それは、シンデレラストーリーとは呼ばないと思っぞ。

『こつなつたら、やけミルクだ!笹岡、ミルク!』

鈴村ベビーがぐずりだした。

『おやおや、鈴村君、ミルクは一時間後だぞ!』

『何!一時間だと!要するに35分じゃないか!そんなに待てるか』

！』

鈴村よ、どうやったたら、一時間が35分という計算になるんだ。

『いいから笹岡、ミルクだミルク！早く持ってこい！』

鈴村ベビーが泣き出して、俺は、思わず抱っこした。

『こら、離せコノヤロウ！男に抱っこされてたま……ZZZ……』
ちよろいな、コイツ。

眠りに落ちた鈴村ベビーをそつとベッドに戻している時、NICUに誰かが入ってくる音がした。

振り返るとそこに、白衣を着た老人が立っていた。

『あ、爺さん先生だ。』

『あの人、年とったから辞めたんじゃないのか？』

そうだ、確か、この人は定年退職して辞めたはずだ。

「何で、君がここにいるんだね？」

俺に気付いた瞬間、老人は、俺を睨みつけてそう言った。

……俺のこと、覚えていたんだな、この人は。

おれも、この老人のことを覚えている。

この老人のことも。

あの忌まわしい、事件のことも。

当時、学生だった俺は、学生実習で、この、NICUに来ていた。大学病院のNICUであるだけあって、聞こえてくる『声』は、悲痛なものが多かった。

その中で、一番奥のベッドに横たわっている、誰よりも一番、状態が悪く、ぐったりしているベビーから、消え入りそうな『声』が聞こえた。

『お腹が……イタイ……』

苦しそうなその様子を、見ていられなかった。

だんだん弱くなっていく『声』を、聞き流せなかった。

おかしいと思われてもいい。

一つの命が消えてしまいうくらいなら、俺一人が、おかしいと思われたって構わない。

誰かに、伝えなくては。

「あの、」

俺は、近くにいた看護師に声をかけた。

「はい、何かしら？」

それは、当時の主任、今の看護師長だった。

「あの子、お腹が痛そうに見えるんですけど。」

俺にそう言われて、ベビーの様子を見に行った看護師は、

「いつも通りに見えるけどねえ？」

と、首をかしげて戻ってきて、また、自分の業務に戻ろうとした。

『……イタイよ……』

ベビーの『声』が、どんどん小さくなっていく。

「すみません！」

俺は、再び同じ看護師に話しかけた。

あまりの剣幕に驚いた様子で、彼女は顔を上げた。

「本当に、お腹が痛そうに見えるんです。よく見てあげてください

「！」
「私には、いつも通りに見えるけど、でも、そうね、ドクターに診てもらおうね。」

そう言うと、彼女は近くにいた医師を呼んだ。

その医師は、今、俺の前で怪訝そうに立っている老人、川鍋かわなべ医師だった。

「フン、ガキが、赤ちゃんの気持ちでも分かったつもりか。」

川鍋医師は俺にだけ聞こえるようにそう毒づくくと、赤ちゃんの元へ行き、

「いつもと変わらん。」

と、吐き捨てて、NICUから立ち去って行った。

俺は、その一件の翌日も、NICUの実習だった。

NICUに入ると、一番奥のベッドに、例のベビーはいなかった。それまで騒がしくしていたベビーたちが、俺を見るなり静かになった。

『おい！お前！昨日あいつがお腹痛いって気付いてくれただろ！』
ベビーの一人が俺に『声』をかけてきて、俺は振り向いた。

『アイツ、死んじまったんだよ、あの後。』

……死んだ？

『お腹に、何かができてて、それが原因だって、看護師たちが言った。』

……え？

『せっかくお前が教えてたのに、お腹の悪いところわかってたらアイツ、助かったかもしれないのに。』
ベビーたちは悔しそうだった。

俺も、悔しかった。

あれから、川鍋医師とも、今の看護師長とも幾度となく顔を合わせているが、二人の口からは一度もその事実は聞かされなかった。

俺の発言は最初からなかったことになった。

看護師である俺に『声』が聞こえたって、診療方針を決めるのは、医師だ。

俺は、どれだけ辛そうな『声』が聞こえたって、何もできない。

俺は、自分の無力さを痛感した。

川鍋医師に睨まれながら、考えた。

そういえば、俺自身も、何でNICUの配属になったのか、知らない。

「私が、推薦しました。」

看護師長が、そう言い、川鍋医師は慌ててそちらを振り返った。

俺も、思わず看護師長を見た。

「彼が、ここにいると、何か、不都合でも？」

看護師長が笑顔でそう言うと、川鍋医師は看護師長から視線を逸らした。

その、不都合である事情は、川鍋医師にとって、一番不都合な事情だからだろう。

「ところで、川鍋先生、今日はどう言ったご用件で？」

看護師長は、先ほどと変わらぬ笑顔で川鍋医師に尋ねた。

「ああ、そうだった、小児科の新人に、NICUを案内しようと思
いましてな。」

「そういえば、看護師たちが、川鍋医師の秘蔵っ子が来たって噂し
てたな。」

「待たせたね、（こっけつ） 纈纈君、入りたまえ。」
若々しい男性が入ってきた。

「あれ？笹岡！」

「纈纈って、お前のことだったのか！久しぶりだな！」
新人の小児科医は小学校の頃の同級生だった。

残念なことにより仲がよかった覚えはないが。

「纈纈先生、よろしいかしら？」

看護師長に話しかけられ、纈纈は慌ててそちらを見た。
「NICUをご案内しますね。」

そう言うと、看護師長は、纈纈を連れて歩き始めた。

川鍋医師は、俺をひと睨みしてから少し遅れて、看護師長たちの
後に続いていった。

『今の人、見た？』

ベビーたちが話し始めた。

『爺ちゃん先生？』

『違うよ、若い方！』

『何か、デキる男って感じだよ。』

『若々しいよね。』

『イケメンだしね。』

『笹岡よりもイケメンね。』

『え？オレのこと？』

何とも絶妙なタイミングで鈴村が目覚めた。

『鈴村のことじゃなくて、鈴村が寝てる間に来た、コウケツとか言うイケメンドクターの話よ。』

『またまた、さやかってば照れちゃって。』

『事実を言っただけよ』

『さやか、それって、ツンデレってやつだろ！本当はオレのこと、好きで好きでたまらないんだろ！』

鈴村よ、今の流れでどうしてそんなポジティブになれるんだ？

『あんたみたいなお子ちゃまに、興味ないの。ごめんね、坊や。』
さやかは素っ気なく言った。

お子ちゃまって、数カ月しか変わらないだろうが……。

『くそー、フラれた！』

でも、鈴村には致命傷になったようだった。

『うっ……。』

またしても、泣くのか、鈴村？

『じゃあ、さやかは、笹岡みたいなオッサンがいいのか？』

八つ当たりだ！

しかも俺に！

『まあ、鈴村よりは、笹岡のほうがタイプよ。』

ごめんな、鈴村、オッサンの方がモテて。

『でもやっぱり一番はパパ。』

嬉しそうに、さやかが言った。

『なんか、わかる！』

『なんかパパって、輝いて見えるよね！』

女の子たちが賛同の『声』をあげる中、

『パパは二番目かな？』

と、紗代がポツリと言った。

おそらく、一番は保なのだろう。

紗代のパパに、心から同情した。

『紗代は好きな人がいるからでしょー！うらやましい！鈴村はママよりも好きだと思える子がいるの？』

『お、オレだって、一番はママだよ。』
急に話題を振られて、鈴村は挙動不審になりながら答えた。

『莊ちゃんは？』

鈴村がそう言った。

俺は、莊太を見た。

一ヶ月間見た中で、俺は、一度も莊太の母親をみたことがなかった。

莊太を生んですぐに亡くなった、と言うわけではないようなのだが、見舞いには、一度も来ていない。

莊太の、一番大好きな異性は、母親なのだろうか？

『どうなんだろうな。』

そう言つと、莊太は寝返りをうつた。

それきり、誰も莊太を追及しなかった。

莊太のそばへと歩み寄ると、莊太が静かに呟いているのが聞こえた。

『一番は、ママに決まってるだろ。』

どうしてだろう？

すごくほっとしたのに、心がすごく、痛かった。

『なあなあ、』

沈黙に耐えかねたのか、鈴村が話しかけてきた。

『笹岡は？』

……はい？

『笹岡はどんな子がタイプなんだよ！』

俺も、ママとか答えなきゃいけないのか？

『この中で。』

今、俺の中に浮かび上がった選択肢の中から、一番空気を読める感じだった「母親」という選択肢が消去された。

まあ、タイプっていうだけだしな。

「この中だったら、紗代かな？」

『ごめんなさい！』

俺の発言からわずか0.12秒後に、俺はフラれた。

告白したわけではないはずなのに……。

『あーあ、笹岡、ドンマイ！』

『笹岡は清纯派が好きなのか？』

『女は紗代だけじゃないから、気を落とすなよ！』

何だかすごく励まされている。

告白したわけではないはずなのに……。

何で俺は、0歳児にフラれて、0歳児に励まされているのだろう

か？

告白したわけではないはずなのに……。

『なあなあ、笹岡！』

鈴村がにやにやしなから話しかけてきた。

『俺たち、今日からモテないブラザーズだ！』
……うわ、こいつ、ものすごく嬉しそうだ。

『な、兄弟！』

いや、兄弟と言われても……。

そんなやり取りがなされていたとはついぞ知らずに、話題の発端が戻ってきた。

『キヤー、戻ってきた！』

『やっぱりカッコいい！』

女の子たちから歓喜の『声』があがった。

『悔しいがオレよりもイケメンだな。』

お、鈴村、負けを認めたか、潔いな。

『ちつとも悔しくないが、笹岡よりもずっとイケメンだな。』
だが、一言多い。

川鍋医師が、俺の方をちらちら見ながら、瀨瀨に何か話しているのが見えた。

川鍋医師が定年退職した後のNICUなら、と、少しだけ期待していた。

だが、新人医師の瀨瀨には川鍋医師の息がかかっている。

瀨瀨とは同級生だったとはいえ、全く仲は良くなかったしな。

俺のもどかしい現状は、これからもずっと、続いていくに違いない。

思わず、ため息が漏れた。

『おい、兄弟！失恋がそんなにショックだったのか？』

……そっちの溜め息じゃない！

弟

『じゃあな、笹岡!』

一日の仕事を終えた俺に、ベビーたちが『声』をかけてきた。

『優先席は私のママに譲りなさいよ!』

『ミルクは三時間おきだぞ!』

『ちゃんと沐浴しろよ!』

『保育器から落ちるなよ!』

……なんだか違う気もするが。

『おい、兄弟!』

NICUを出る直前に、鈴村が話しかけてきた。

『可愛い子がいたら、オレにもちゃんと紹介しろよ!』

返事の代わりに溜め息が出た。

ちなみに言っておくが、俺は、これからまっすぐ家に帰るだけだ。

《モテないブラザーズ》の相方は、俺がNICUから外に出るの

は、合コンのためだといつも勘違いしているようだ。

『おい、兄弟!ちゃんと紹介しろよ!』

鈴村の『声』を無視して、俺は、NICUから出た。

病院を出た俺は、不意に声をかけられた。

「兄貴!」

それは、《モテないブラザーズ》の相方ではなく、俺の本当の弟の雅之^{まゆゆき}だった。

「お、雅之、どうした?」

「仕事が早く終わったから、久しぶりに兄貴と飲もうかと思って。」

視界の片隅で、ちょうど今日、NICUを退院したベビーが、病院から出てきて、母親に抱かれて上機嫌に『声』を發した。

『わらびー……』

ワラビー？

カンガルーっぽいアレか？

「兄貴、何食べたい？」

『……もちっ！』

「わらびもち？」

「……兄貴、ご飯食べないの？」

不思議そうな顔をする雅之の向こう側で、ベビーがこちらを振り向いてニヤリと笑うのが見えた。

……はめられた。

そうだった。

雅之には、『声』は聞こえないんだった。

でも、雅之の存在がなかったら、俺は、『声』のことを、よく理解できないまま、人間不信になっていたと思う。

幼い頃の俺は、『声』は皆、聞こえているものだと思っていた。

周りの人間も、俺が赤ちゃんと話していても、想像力が豊かだと思っていたのか、あまり気に留めていなかった。

俺が4歳の頃のことだった。

母親に抱き付いたとき、小さな小さな、『声』が聞こえた。

『……ん？……んー……。』

少し起きて、再び眠りについたようなその『声』は、かすかにしか聞こえなかったが、俺にはわかった。

「ママのお腹に赤ちゃんがいる！」
それは、母親が、妊娠の事実に気付くよりも、ずっと前のことだった。

この時も、俺の周りの人は、兄弟の繋がりかなんかでそんな気がしたんだろうと、呑気に考えていた。

そうして時が過ぎ、雅之が生まれた。

その頃からだった。

俺は、家族にも、自分にも違和感を覚え始めた。

雅之が生まれてから数日後、母親が、雅之を連れて家に帰ってきた。

嬉しそうにビデオを撮る父親の後ろから、俺は、駆け出した。

「雅之、おかえり！」

『あれ？この声、聞いたことある！』

「僕は、雅之のお兄ちゃんだよ！」

『わあ、お兄ちゃん！ただいま！あ、おしっこ出ちゃった！……オムツ気持ち悪い！』

雅之は『オムツ気持ち悪い』と言いながら泣き出した。

雅之の体を揺らしながら、ひたすらあやし続ける母親。

笑顔でビデオを撮り続ける父親。

何で、雅之の『声』を無視するの？

俺が泣いて訴えたときには、無視しないじゃないか！

皆、ひどい……。

とつとつ、痺れを切らした俺は、母親に言った。

「ママ、雅之のオムツ！」

母親は、そのとき初めて気づいたかのように、雅之のオムツを慌ててかえ始めた。

その日の晩。

父親が、嬉しそうな顔をして言った。

「明、今日の雅之のビデオ、観るぞ！」

その時、俺の脳裏に、昏間の光景が浮かんだ。

オムツが気持ち悪いと訴える雅之を無視して、ビデオを撮り続ける父親をはつきりと思い出した。

そのビデオを観てしまつたら、自分まで、雅之を無視したような気持ちになってしまいそうで、俺は、嫌だと必死に抵抗した。

だが、5歳の力で大人に敵うはずもなく、抵抗もむなしく俺は、テレビの前まで連行された。

ビデオは、雅之を抱っこした母親が、車から降りてくるところから始まっていた。

突如として画面上に自分の後ろ姿が出てきた。

と言つことは、そろそろ、あの悲惨な場面が来てしまう。

「雅之、おかえり！」

……………あれ？

「僕は、雅之のお兄ちゃんだよ！」

「うー……………んぎゃあ、んぎゃあ……………！」

……………『声』が、聞こえない。

「パパ、雅之の『声』、聞こえないよ！」

「何言つてんだ、明、雅之でっかい声で泣いてるじゃないか！」

「違つよ、この時の雅之の『声』が……………」

「この時、雅之はでっかい声で泣いてたぞ。」

ビデオの中の雅之は『声』を発していなかった。

俺には当然のように聞こえていたものが聞こえないというのに、家族は不思議に思っていなかった。

むしろ、家族は、俺がおかしいことを言っていると思い始めた。

耳鼻科にも連れて行かれ、精神科にも連れて行かれた。

いろんな検査をされて、どれも、正常値という結果が返ってきて、両親も医者も、首をかしげていた。

ある日のことだった。

その日もたくさん検査をされて、疲れ切った俺に、雅之が話しかけてきた。

『ねえねえ、お兄ちゃん。』

「どうした、雅之。」

『お兄ちゃんはたくさんお出かけするけど、どこに言ってるの？幼稚園？』

「今日は、病院に行ってきたんだよ。」

『病院？僕が生まれてきたときにいたところ？お兄ちゃん、まだ、へその緒ついてたの？』

「へその緒？」

『おへそとお母さんをつないでる管だよ。』

「そんなのついてないよ？なんかね、パパとママが、僕がおかしいこと言ってるって、いろんな医者さんのところに連れて行くんだ。」

少しの間、沈黙が流れた。

『ねえ、お兄ちゃん。』

雅之が、再び話しかけてきた。

『たぶんね、パパとママには、僕の『声』、聞こえてないんだと思

「うよ。」

「え？」

「前、お兄ちゃん、パパと一緒にビデオ見てたよね。」

「うん。」

「パパやママには、きつと、お兄ちゃん以外の皆には、あの、ビデオみたいにも、僕の『声』は、聞こえていないんだと思うよ。」

「え？そんな……」

俺は、それまで一度も考えたことがなかったんだ。

まさか、自分以外の全員が、『声』が聞こえていないなんて。

「確かめてみる？」

雅之が、少し、ほほ笑んだ。

俺たちから少し離れたキッチンで、母親が、夕ご飯を作っていた。その後ろに、うごめく黒い生き物が見えた。

ママの大嫌いなゴキブリだ。

「ママ！後ろ！ゴキブリ！」

雅之が大きな『声』で叫んだ。

母親は、ゴキブリが大嫌いで、「ゴ」の後に「キ」という音を発しただけでも、飛び上るほどだった。

ところが、雅之の『声』に、母親は無反応だった。

「ママ、平気になったのかな？」

「きつと、もう少ししたらわかるよ。」

母親が、振り返り、硬直した。

そして、大声で叫びながら、キッチンから出てきた。

「明！ゴキブリ出た！何とかして！」

母親が、ものすごい形相で俺のところによつてきた。

「ママ、ゴキブリ、平気になったんじゃないの？後ろにいたのに『飯作ってたじゃん！』」

「なるわけないでしょあんなの！ていうか、知ってたなら教えてよ！」

「ね、お兄ちゃん。」

雅之が落ち着いた調子で言った。

俺は、雅之を見て、無言でうなずいた。

雅之が教えてくれたんだ。

皆には「声」は聞こえないってこと。

居酒屋のカウンター席で、俺と雅之は、隣同士で飲んでいた。

「そういえば、今日、病院の前で兄貴を待ってたら、纈纈先輩に会ったよ。」

「あ、あいつ、今年から、うちの小児科医になつたらしい。」

「ていうことは、兄貴、一緒に仕事するんだ、いいなあ。」

「どこがいいんだよ、あんな嫌味なやつ。」

「だって、纈纈先輩、口は、多少悪いけど、基本、親切だし。誠心誠意真心を込めて話せばちゃんと、聞いてくれるし。」

そういえば、雅之は、纈纈と仲良くやっていたな。

「俺、あいつに、誠心誠意真心を込めて話すとか、無理だ。」

「無理だったら、フリだけでもすればいいじゃん！纈纈先輩、意外と騙されるよ！」

たまに思う。

俺の弟は、少しだけ、腹黒い。

俺の弟は、少しだけ、ずる賢い。

でも、それは、今に始まったことじゃない。

赤ちゃんのところから、雅之は、少しだけ、ずる賢かった。

『お兄ちゃん、お兄ちゃん!』

雅之が話しかけてくるときに、必ずしも俺が、雅之に集中しているとは限らない。

雅之が赤ちゃんの頃の俺は、まだ、5歳なのだから、当然、遊びたい盛りだ。

「なあに、雅之。」

おもちゃに集中しながら、俺が何となく返事をする事だってある。

『オムツが、気持ち悪いんだ。』

「そっかあ。大変だね。」

雅之の訴えに、うわの空で答えることだってある。

だが、雅之は、いつの間にか、魔法の言葉を覚えていた。

『お兄ちゃん、泣くよ?』

雅之に、大泣きされて、怒られるのはもちろん俺だ。

俺が、近くで遊んでいて雅之がなくなると、なぜか、俺にありもしない冤罪がかけられて、俺は、母親と父親からしこたま怒られることになってしまっていた。

そんなわけで、雅之に泣かれては、困る俺は、雅之の『魔法の言葉』を聞いたとたんに、母親のもとへと駆けつける習性がついてしまっていた。

兄に向って、泣くよ、と脅す弟と、弟に屈して、すっかりパシリになってしまった俺。

水面下では、そんな関係だった俺たちだったが、見た目上は、賢

い弟と、気が利く兄という構図が、このころから成り立っていたな、
と思い出した。

それからも、雅之は、少し腹黒く、少しずる賢く育っていったが、
うまく、世の中を生きていくためには、必要なノウハウだったんだ
と今では思う。

「仕事には慣れたか？」

雅之は、俺の問いかけにふと顔を上げた。

「まあ、ぼちぼち。兄貴は？新しい職場、どうなの？」

「まあ、ぼちぼち、だな。」

もしも雅之にも『声』が聞こえているならば、もしも、雅之が『
声』の存在を覚えていたならば、俺は、NICUでのベビーたちの
会話なんか話して聞かせていただろう。

さすがに弟であっても『声』の存在を知らないものに、『声』の
話をしようとは思わなかった。

‘知らない’と言うよりは、‘忘れた’と、言った方が正しいのか
もしれない。

雅之が『声』を失ったあの日のことを、俺は今でも覚えている。

『お兄ちゃん！』

その日の雅之は上機嫌だった。

「雅之、どうしたの？」

『ボクね、なんとなく、わかっちゃったんだ！』

「何が？」

『ママや、パパとお話する方法！』

「ママや、パパは『声』は聞こえないのに？」

『だからね、自分のお口でおしゃべりするんだ！お兄ちゃんがおしゃべりしてるみたいに！』

「あ、そうか！」

ちようど、母親がこちらに歩いてきた。

『お兄ちゃん、見てて！』

雅之は、そつと俺に囁いた。

それは、雅之が発した、最後の『声』だった。

「あら、雅之、起きてたの？」

母親が雅之を覗き込んだ。

そして、次の瞬間、

「ママ」

それは、雅之が初めて、自分の口から言葉を発した瞬間だった。

それから俺は、徐々に気づいていった。

雅之はあの瞬間から、『声』を発しなくなっていたこと。

雅之には『声』が、聞こえなくなったこと。

雅之は、それまでの記憶を失ったこと。

俺にとっての初めての兄弟は、俺にしか、『声』は聞こえないということを教えてくれた。

俺にとっての初めての兄弟がいたから俺は、『声』は、いつしか失われるものだと思った。

俺にとっての初めての兄弟がいたから『声』を発していた時の記憶は、失われるものだという悲しい事実を知ることができた。

「今日は僕のおごり。」

と言って、会計を済ませた弟が、外に出てきた瞬間はっとした顔をした。

「わらびもち、頼むの忘れてた！」

弟よ、そこは、発言自体忘れてやるのが優しさだ。

救世主

《モテないブラザーズ》の解散の日が近づいてきた。
俺に彼女ができたわけでも、鈴村に彼女ができたわけでもない。
近々鈴村が退院するのだ。

今日は、鈴村の退院前の聴力検査をしに、検査の人が来ていた。
『おい！そこのお前！今、絶対に何かつけただろ！にゆるっとするぞ、にゆるっと！』

鈴村がぐずりだし、検査技師はパツと手を離れた。
「何でもないよ、何もしてないよ？」

『そうか。ならいい。』

その言葉にあっさり騙されて、鈴村がおとなしくなったのを見て、
検査技師は再びシールを貼り始めた。

『おい、おでこ！おでこヒヤツとしたぞ！』

鈴村が再びぐずりだしたのに気付いた検査技師は、手をパツと離した。

「あれー？どうしたのかな？何にもしてないよ？」

『そうか、気のせいかな。』

鈴村よ、単純すぎるぞ。

単純すぎる鈴村は、上手いことごまかさながら検査を受け、
ごく順調に検査は終わった。

「お利口さんだったから、すぐ終わったねえ！さすがだね！」

検査技師が手際よく機械を片付けながら鈴村に話しかけた。

『お姉さん！そんなお利口さんオレの、彼女にならない？』

鈴村よ、いくらなんでも見境が無さすぎるぞ。

まあ、そんな鈴村の見境の無さすぎる告白が、『声』の聞こえない検査技師に届いているはずもなく、

「ごめんね、ちょっと痛いよ！」

鈴村に強力に貼り付いたテープが剥がされた。

『ぎゃー！イタイー！ムリー！悪魔ー！』

痛みに耐えきれず、鈴村は、大音量で泣き出した。

「あらあら、さっきまでお利口さんだったのに、どうしちゃったのかしら？」

荷物をまとめた検査技師は首を傾げながらそう言うのと、

「じゃあ、鈴村くんの検査終わったんで、失礼します。」

と、俺に一礼して、NICUから去っていった。

『俺とのことは、遊びだったのかー？』

鈴村よ、それは遊びではなく、検査だ。

『鈴村くんうるさいー！』

『眠れないー！』

『鈴村うるさい！』

『鈴村フラれた！』

『少しは静かにフラれるよ！』

鈴村の泣き声に触発されて、ベビーたちが泣き始めてしまった。

とりあえず、何とか收拾をつけなければ……。

俺は、諸悪の根源である鈴村のもとへと歩み寄った。

『失恋、痛すぎるぞ、兄弟！』

鈴村よ、それは、失恋の痛みではなくテープを剥がした痛みだ。

仕方がないので、俺は、鈴村を抱っこして、あやし始めた。

『そう、何度も何度も同じ手にかかってたま……ZZZ……』

鈴村よ、君は面白いほど何度も同じ手にかかっているぞ。

鈴村につられて泣き出したベビーたちを、何とか落ち着かせてながら、あの喧騒の中泣かなかったベビーたちの様子も見て回った。

まず、3日前に入院してきた谷崎ベビー。

こいつは、ミルクを飲むと、次のミルクの時間まで、基本的に、爆睡だ。

谷崎の顔を覗き込んだ。
案の定、爆睡だった。

次に、重鎮、荘太。

もはや、ちよつとやそつとでは、泣かないと、本人は言っている。
荘太の顔を、覗き込んだ。

『何か、用か？笹岡。』
相変わらずの様子だ。

ちよつと意外だったのは、おませさんのさやかだ。

泣いてわめいたりはしなくても、いつもなら何らかの『発言』があつてもおかしくないのだが、今日はやけにおとなしい。

向かいのベッドの谷崎に触発されて爆睡しているのだろうか？
さやかの顔を覗き込もうとしたとき、消え入りそうな『声』が聞こえた。

『……………うう……………』

さやかは、眠ってなどいなかった。

小さな『声』で、唸っていた。

『どうした？さやか？』

『……………イタイ……………』

『胸が、痛むのか？』

さやかは、不整脈を患っているのだが、不整脈の発作は今は起きていないようだった。

『……………オナカ……………イタイ……………』

『お腹？』

嫌な予感がした。

泣き止んだベビーたちが、さやかの異変に気付き始めた。

『さやかちゃん、どうしたの？』

『さやか、どうした？』

『笹岡、何とかしてよ！』

『おい、笹岡！』

そつだ、誰かに知らせなければ……。

ナースステーションのほうを見ると、医師らしい白衣の人物が見えた。

近寄つて、確かめてみると、そこにいたのは纈纈だった。

纈纈には、川鍋医師の息がかかっているんだった。

俺が、言ったところで、診てなどくれないかもしれない。

だが、今、NICUにいる医者は、纈纈だけのようだった。

『笹岡！』

『笹岡、早く！』

何もしていないうちから、決めつけてはいけない。

俺は、纈纈のもとへと歩み寄った。

「纈纈先生、ちょっといいですか？」

纈纈は、少し、驚いた様子を見せ、そしてまた、目を伏せた。

川鍋命令で無視することになつてるのか？

そんな、小学生じゃあるまいし！

そう思っていた矢先、纈纈は、読んでいた本を閉じて、こちらに歩いてきた。

俺は、纈纈を、さやかののもとへと連れて行った。

「発作は、しばらく続いているのか？」

纈纈にそう言われて、心電図のモニターを見ると、ちょうどさやかは不整脈の発作も起こしていた。

「発作は、さつきからだと思います。」

不整脈は、ほどなくしておさまった。

纈纈は、少し、怪訝そうな顔をし、学会の準備が忙しいからと言
い残し再び先ほどの位置へと戻っていった。

やはり、駄目か。

俺は、雅之みたいに、上手に立ち回ることなんてできない。

『声』が聞こえたって、頭がおかしいと思われるだけなんだ。

だったらいつそ、最初から、『声』が聞こえなかったことにして
しまえば……。

『おい！笹岡！何やってんだよ！』

莊太に話しかけられ、俺は、莊太のほうを向いた。

『今は、不整脈じゃなくてお腹のこと、聞きたかつたんだろ？何あ
つさり引いてるんだよ！』

莊太は、俺たちの会話の内容を理解していた。

『笹岡は、さやかを見捨てるのか？』

俺は、見捨てたいとは思っていない。

『笹岡は、大人の癖に、さやかを見捨てるのか？』

大人だからこそ、守らなければならぬのに、

『笹岡は、『声』が聞こえる癖に、さやかを見捨てるのか？』

『声』が、聞こえるからこそ、伝えなければならぬのに、

『なあ、笹岡！』

でも、俺は、同じ後悔を繰り返すことが怖い。

『俺、笹岡が来る前に、聞いたんだ！』

莊太の『声』は、必死だ。

『シャツチヨーが、俺たちに言ったんだ！』

看護師長が？

『もうちよつと、待っててね、もうちよつとで、救世主が来るから、
きつと、みんなの気持ちわかつてくれる、救世主が現れるから』

て。』

そういえば、看護師長が、俺をNICUに推薦したと言っていた。『涙ぼろぼろ流しながら、言ってたんだ!』

看護師長は、あのことを、ずっと後悔していたのかもしれない。

『なあ、笹岡!』

看護師長は、後悔を繰り返したくないから、俺をNICUに推薦したのかもしれない。

『救世主って、笹岡の事じゃないのかよ?』

じゃあ、俺は?

『俺たちの『声』、届けてくれないのかよ?』

俺は……。

俺は、あの時のことを思い出した。

その『声』のことを、伝えようと思ったその時、俺は、変だと思われても構わないと思った。

俺が、後悔しているのは、『声』を、伝えようとしたことじゃない。い。

『声』が、伝わらなかったことで、失われた命があるということなんだ。

俺は、再び、纈纈のもとへ歩み寄った。

この前、雅之が言っていた。

誠心誠意、真心を込めて言えば、纈纈は伝わる相手だと。

それが無理なら、フリだけでもすればいいと。

「纈纈先生、もう一度、平山さやかちゃんを診てもらえませんか?」

「さつき、診ただろう? 不整脈の発作が、もう一度出たら呼んでくれ。」

「そっちじゃないんです。」

纈纈が、怪訝そうに、顔を上げた。

「あの子のお腹を診てほしいんです。」

俺は、真剣なまなざしで、纈纈を見た。

俺は、雅之みたいにくまく立ち回れない。

誠実な、フリなんてできない。

俺には、頭を下げることもしかできない。

纈纈は、さつきよりも怪訝そうな顔をして黙り込んだ。

少しの間の沈黙が、永遠の時間のような気がした。

この間にも、刻一刻と、さやかの声は、弱弱しくなっている。

「私からも、お願いします。」

不意に後ろから、声が出た。

振り返るとそこに、看護師長がいた。

「もう一度、さやかちゃんを診てあげてください。」

看護師長がさらに念を押すと、纈纈は、立ち上がり、さやかもとへと向かっていった。

俺は、看護師長を振り返った。

看護師長は、穏やかな顔をして頷いた。

さやかのお腹を触診した纈纈は、首を傾げながら、PHSを取り出し、電話を掛け始めた。

どうやら、精密検査をする事に決めたようだった。

検査に連れていかれるさやかを、ベビーたちが不安げに見守っていた。

あれから、どれくらいが経っただろうか？

さやかも、NICUに戻ってきた。

検査の後、緊急手術を受けたさやかは、今までよりもたくさん
機械に繋がれていたけれども、

それでも、確かな息づかいを感じた。

『笹岡、ありがとな。』

莊太がそつと、囁いた。

『纈纈にもちゃんと、お礼、言っとけよ。』

こいつは何でいつもこんなに上から目線なんだろう？

一日の仕事を終えた俺は、この前来た居酒屋にいた。

この前と大きく違うのは、隣に座っている人間だろう。

俺の隣には纈纈が腰かけている。

帰り際に、飲みに行こうと誘われたのだ。

俺も、今日のお礼が言いたかったので、ちょうどいいと思ってつ
いて来てはみたものの、元々仲がよかったわけではないので、会話
がほとんどない。

このまま無言でいても仕方ないと思い、ちょうど運ばれてきたビ
ールに手をつけようとした時、纈纈がそれを制した。

「酒が入る前に聞きたい。」

纈纈のあまりの真剣な眼差しに、俺は、ビールに伸びかけた手を
引っ込めた。

「笹岡は、いったいどうやってあの子の異変に気づいたんだ？」

俺は、一瞬、黙った。

さて、何と言おうか。

でも、言わないとビールは飲ませてもらえないようだ。

「様子とか？」

「様子なら、俺だって、最初に笹岡に呼ばれたときに、すっかり見た。どんな様子を見てあの子がお腹が痛いと思ったんだ？」

「やっぱり適当に言っても、通用しないか。」

雅之は、纈纈のことを、誠心誠意真心を込めて話せば通じるといった。

「ここで、誠心誠意真心を込めて答えるのであれば、さやか、『声』が聞こえたと言つべきであろう。」

でも、信じてくれるとは到底思えない。

そんなことをしている間にも、刻一刻と、ビールは汗をかいていつている。

「やばい、ビールがぬるくなる。」

しばらく黙っていた俺は、もう一度、纈纈を見た。

明らかに、答えを求められている。

「雅之ならうまいことかわして答えるんだろうが、俺は、あいつほど賢くない。」

「思わず、ため息が出た。」

「まだ、纈纈の視線を感じる。」

「纈纈の中で何らかの結論に達しない限り、ビールは飲ませてもらえない。」

「言つしかないのか？」

「覚悟を決めて、俺は、纈纈をまっすぐに見た。」

「信じられないことだと思っただが、俺は、赤ちゃんの『声』が、聞こえるんだ。」

「声だつたら、普通、聞こえるだろ。」

「纈纈も、聞こえるのか？」

「はあ？何のことだ？」

その反応に、雅之が生まれて間もないころの両親の姿が重なった。

しまった。説明が足らなかった。

「赤ちゃんの、泣き声じゃなくって、その、何ていうか、赤ちゃんの『想い』が『声』として聞こえるんだ。」

「はあ？」

ああ、明らかに疑いの眼差しを向けられている。

やっぱり、そう簡単に信じてくれるわけないよな。

俺たちの間に少しの間、沈黙が流れた。

「ねえ！」

不意に、沈黙が破られた。

その言葉を発したのは、俺でも、纈纈でもなく、急に、俺たちの間に割って入ってきた美人だった。

その顔に、見覚えがあった。

産婦人科医の谷岡翠先生だ。たにおかみどり

ベビーたちのアイドル的存在の翠先生が、今、べろんべろんに酔っぱらいながら、俺の肩にのしかかっけてきている。

……先生、近いです。

「今の話、本当？赤ちゃんの『声』が聞こえるとか……。」

しかも、俺たちの会話を聞いてたっぽい。

不意に、肩が軽くなった。

「ちよつと、翠先生、何ほかの客に絡んでるんですか！」

気付くと別の女性が翠先生を俺から引きはがしていた。

「あ、纈纈先生……！」

女性は、纈纈を見て、一瞬、歓喜の声をあげたものの、すぐに、翠先生を引っ張っていった。

「ちよつと、舞ちゃん、私、アレと話があるの！ねえ……。」

翠先生の声はだんだん遠ざかって行った。

……先生、俺は、アレですか？

そして、再び、静寂が訪れた。

「笹岡、」

纈纈が話しかけてきて、俺は、纈纈のほうを向いた。

「正直、『声』が聞こえるとかいう話は信じられない。」

やっぱりそうか。

肩を落とす俺に向かって、纈纈は続けた。

「だが、今回、笹岡があの子の何らかの異変を見抜いたことだけは確かだ。」

纈纈は、ここになって、初めてビールに口を付けた。

どうやら、考えがまとまって、ビールが解禁になったらしい。

俺もビールに口を付けた。

やっぱり、ぬるくなってる……。

「俺は、結構よくベビーたちの様子を見ているほうだと自負していたんだがな。」

纈纈は自嘲的にほほ笑んだ。

「だが、俺の観察眼もまだまだのようだし、今後もああいった異変に気づいたら教えてくれ。」

どうやら、纈纈は俺に観察眼で負けたと思っているらしい。

それでも、これからも、あいつらの『声』のことを聞いてくれる医者があることが、あいつらにとってどれほど心強いことだろうか？

纈纈こそ、NICUに入院するベビーたちの救世主だとそう思った。

「さて、何か食うか。」

そう言った纈纈は、店員を呼んで言った。

「わらびもち、」

「二つで、まさかのわらびもち？」

「二つ。」

しかも、俺の分まで？

正確すぎる腹時計

『ミルクが切れた！ミルクミルク……！』
谷崎ベビーが泣き出した。

ということは、もうミルクの時間か。

『ミルクミルク！お腹がすいたよ！』

時計を見ると、午後の3時を指していた。

谷崎のママは、今日もミルクを自分で飲ませたいと言っていた。

ということは、谷崎ベビーのミルクは、お母さんが来るまでお預けってことか。

でも、確か、谷崎のお母さんって……。

インターホンの鳴る音がした。

「平山さやかの母です。」

オペ後順調に回復したさやかは、今日から面会を許された。

だからこそ、面会時間に一番乗りにも母親が来るのもつなずける。

『あーママだ！ママ！ママ！』

さやかも大喜びだ。

『キヤー！今日はパパもいるの？パパ、今日も素敵！』

さやかのパパが聞いたら、喜ぶんだらうな。

『私のママじゃなかった！』

そうだね。

その向かいで、谷崎は明らかに不機嫌そうだ。

『ミルクミルクミルク……ミールークー！』

相変わらず谷崎がわめいている中、再びインターホンが鳴った。

「山口です。」

谷崎、残念。今度は紗代のママだったね。

『ミルクミルクミールーキー！……笹岡バカヤロウ！』

完全なやつあたり、ありがとうございます。

谷崎の母親は、マイペースらしくて、いつも遅刻気味だ。

だから、俺たちも、谷崎のミルクのタイミングを少し遅らせようと努力はしているのだが、いつも谷崎は、きっかり3時間おきに泣きわめき始める。

今日は、ほとんどのベビーの家族がやってきた中、まだ面会に来る家族がないのは、谷崎と、荘ただけになった。

『ミルクミルクミルクミルク！グレルぞ！』

その年からグレないでほしいな……。

インターホンの鳴る音がした。

きつと、どつちかの家族が来たに違いない！

「鈴村です！」

ちよつと待て！

鈴村って、この間退院しただろうが！

先輩看護師としばし談笑した後、鈴村の母親が、我が子連れてNICUに入ってきた。

『よう、カノジヨたち！オレがいなくて寂しかっただろ！』

『誰だよお前！ミルクミルクミルク！』

鈴村よ、タイミングと相手が悪かったな。

『谷崎ちゃん、密かにタイプだったのに!』

鈴村の場合はタイプの許容範囲が広すぎる。

『そんなこと知るか!ミルクミルクミルク!』

『笹岡!またフラれた!』

うん、見てたよ。

久しぶりにNICUに来てまでフラれた鈴村は大泣きしだして、母親にあやされながら出て行った。

「あら、こんにちは、お久しぶりです。」

出入り口のところ、女性の声がした。

あの声は……。

『ママ!ママ!ミルク!そいつらどうでもいいからミルク!』

そうだ、谷崎の母親の声だ。

少しして、インターホンの音がした。

「谷崎です。」

さっきまで、声、聞こえまくってましたよ。

『ママ!ママ!ミルクミルク!オムツはいいからミルク!オムツもちよつと気持ち悪いけど、とりあえずミルク!オム……あ、ありがとう!ミルクミルクミルク!』

マイペースにオムツを替えた母親が、ミルクをあげ始めると、ようやく谷崎は、泣き声も、『声』も静かになった。

俺は、喧騒の中、荘太の方を見た。

今日も、荘太のところには誰も来ない。

今日だけは、荘太の家族に来てほしかった。

今日は、莊太の1歳の誕生日だ。

周りのベビーたちが家族との面会で喜びの『声』を上げる中、莊太は一人、目を瞑っていた。

自分が生まれたその日に、家族が一人も来ないなんて……。
そんなの、寂しすぎるだろ？
そんなの、辛すぎるだろ？

俺は、莊太のもとへ歩み寄った。

『どうした、笹岡？』

「莊太、今日、誕生日だよな、おめでとう。」
本来ならば、莊太の家族が来て言うべき言葉だ。
たとえ忙しくても、忘れちゃいけないことだっただってあるはずなのに。
そこには確かに息づく一人の命がいるというのに。

刻々と時間が過ぎていく。

面会時間の終わりが近づいてくる。
時計を見て、帰り始める家族たち。

莊太の誕生日の日の面会時間が、終わってしまっ。

面会に来た家族たちがすべて帰ってしまった頃、インターホンが鳴った。

「中山です。中山荘太の父です。」
若い男性の声だった。

時計を見た。

面会終了の5分前。

招き入れると、荘太の父親は、足早に荘太のもとへと駆け寄ってきた。

「荘太！誕生日おめでとう！」

そうか、ちゃんと、覚えてくれていたんだ。

「荘太、今日はもう一つ、いいお知らせがあるんだ！」

荘太の父親が目を輝かせて言った。

「弟ができたんだ！来年には荘太はお兄ちゃんだぞ！」

一瞬、耳を疑った。

ろくに荘太のお見舞いにも来ないくせに、弟ができた？
どういうことだ？

面会時刻終了の音楽が鳴り、荘太の父親は「また来るよ」と言って、立ち去って行った。

家族に会って、はしゃぎ疲れたベビーたちは眠りに落ちていた。
静寂の中に取り残された俺は、そっと、荘太のところへやってき

た。

『どうした、笹岡？不満そうな顔をして。』

　　莊太がちらりと目を開けて言った。

「だって……いいのか？ 莊太は。」

　　ちっとも面会に来ない家族。

　　誕生日ですら、父親が五分ほどいたただけなんて。

　　その上、莊太の存在などまるでなかったかのように、弟ができたなんて。

　　たった1歳になったばかりの幼い子供がこんなに厳しい現実にはさらされているなんて。

　　そんなこと、あつていいのか？

『仕方がないことだ。』

……え？

『俺は、父親が来てくれただけで満足だから。』

　　莊太は家族のことを大切に思っているのに、莊太の家族にとって、

　　莊太は、どうでもいいんだろうか？

『俺は、気にしていない。だから、笹岡も気にするな。』

　　そついうと、莊太は目を閉じた。

　　何で、莊太はあんなに冷静でいられるのだろうか？

　　眠りに落ちた莊太から離れ、俺は自分の仕事を始めた。

　　莊太は気にするなって言ったんだし。

　　俺が考えてもどうしようもないことだ。

『ミルク切れじゃあ！コノヤロウ！』
俺の思考は谷崎のミルク時報によって打ち切られた。

きっかり18時。

彼女の腹時計はブレない。

『悲鳴』

『笹岡、緊張してるのか？』

緊張していないと言ったら、嘘になる。

何といつても、今日は、NICUの配属になってから初めての夜勤なのだ。

日勤よりもナースも医師も少ないために、何かがあった時にはそこにいる医師やナースにかなりの負担がかかる。

『笹岡、緊張した時は、手に人々人って書いて飲み込むといいらし
いぞ。』

『何を飲むの？』

『手？』

『手だよ！』

緊張を鎮めるために、命がけだな。

『笹岡、緊張した時には酒を飲むといいつてじいじが言ってたぞ！
勤務時間中ですから！』

『笹岡、風邪にはネギを丸のみするといいらしいぞ！』

あ、もう、緊張とかどうでもよくなってますね。

『笹岡、オムツ！』

オムツですね、はい、ただいま。

初めての夜勤は、とても平和に過ぎていた。

最初のうちは俺をからかうのに夢中だったベビーたちも、次第に眠りに落ちていった。

静かに夜が更けていった。

静寂の中、電話が鳴った。

主任が電話に出た。

主任の顔が険くなった。

真剣な声色で電話をしていた主任は、受話器を置きながら、俺のほうを振り返った。

「笹岡！緊急帝王切開の児が緊急入院、緊急オペになりそうだ！今から言うものをすぐ用意しろ！」

部屋中に緊張が走った。

相当状態が悪いベビーが来る。

NICU中に走る緊張感からもそれが伝わってくるが、俺がそう感じている原因は、それだけではなかった。

電話が鳴るよりも前から、俺には聞こえていた。

断末魔の叫びとでもいうような、ベビーの『悲鳴』が。

耳をふさいでも、心に重たく響いてくる『悲鳴』。

『悲鳴』は、だんだんこちらに近づいてきた。

『うわあああああつつつ！死にたくないよ死にたくないよ死にたくないよ！』

両親が入ってきた。

『パパ！ママ！パパ！ママ！助けて！死にたくないよ！もっと一緒にいたいよ！』

救命措置が続いている。

生きたい、という思いが『悲鳴』になって鳴り響く。

それを無視するかのごとく無機質に鳴り響くアラーム音。

ふと、医師が、少し離れたところにいた両親を呼び寄せた。

ゆっくり近づく両親。

『パパ！ママ！パパ！ママ！助けて！もっと一緒にいたいよ！一緒に生きたいよ！パパ！ママ！』

母親が、医師に勧められて子供を抱き上げた。

『パパ！ママ！パパ、ママ、大好きだよ……。』

午前1時37分生まれて3時間足らずの小さな命はお母さんの腕の中で息絶えた。

部屋が静寂に包まれた。

泣き崩れる母親。

その背後にいる父親の目にも涙が浮かんでいる。

「ごめんね、ごめんね……。」

静かなNICUに母親の声だけが響き渡った。

そんなに謝らないでください。

そんなに泣かないでください。

あなたたちのお子さんは、最後に、あなたたちのことを『大好き』
って言ったのだから。

採血ウォーズ

衝撃の夜から一夜が明けようとしていた。

外が仄かに明るくなり始めた頃に奴らはつごめき始めていた。

老人並みに早起きだな……って、お前ら新生児だろうが！

『いいか、もう一度、流れの確認だ。』

『まずは、私がぐったりするんだよね。』

『で、敵が紗代の無事を確かめた頃にあたしでしょ？うまくこれが外せればいいけど、ダメだったらとりあえず泣いとくわ。』

『さやかの後には、オレが泣けばいいか？』

『そうだ、次に俺が泣く。』

『荘ちゃんの次にボクね。』

『ボクは、このチューブ、外したらいい？』

『それはダメだ。シャレにならない！』

『じゃあ、ボク、暴れる！』

『いいけど、程々にしろよ。』

『僕も泣いて暴れるよ！』

『そうだな。それで、敵がモタモタしているうちに9時のミルクの時間になって、谷崎が泣き出すから、採血どころじゃなくなる……』

『

』完璧すぎる！』

』完璧すぎるよ、荘ちゃん！』

』今日こそは上手くいきそうね。』

……朝からよく『声』が聞こえると思ったら、採血されないための算段かよ！

だからいつも朝がやたらと忙しいのか！

まあ、昨晚のショックが響いていないのはいいことだけど。

ふと、荘太と目が合った。

『しまった!』

『どうしたの、荘ちゃん?』

『今日の夜勤、笹岡だった!』

『うわ、じゃあ、今までの僕たちの話聞かれてたんだ!』

『あーあ!』

『ダメじゃん!』

『もうバレてるね。』

『ちっ!』

ちなみに、俺がいてもいなくても、奴らの《採血阻止作戦》は成
功したためしがない。

ボクたち、大人をなめちゃあいけないよ。

外がいよいよ明るくなってきた。

夜が明けた。

奴らとの、戦い、が幕を開けようとしている。

「おはようございます!」

爽やかな挨拶とともに、NICUに入ってきたのは瀬瀬だった。
ということは、今日の採血当番は、瀬瀬か。

『瀬瀬か……。』

『イケメンなんだけどね……。』

『微妙。』

『……今日は失敗しないでね。』

なんか、全員、いまいちな反応。
纈纈、ドンマイ！

「さて、始めるか。」
纈纈の顔に、緊張の色が見えた。

俺がベビーを押さえて、纈纈が採血をする。

『纈纈！痛いぞ！下手くそ！』

『笹岡、押さえるな！逃げられないじゃないか！』

『……失敗しないでって言ったのに。』

『いーたーいー！』

『み、ミルク？違う！痛い！』

『痛いじゃないか、バカヤロウ！』

全員が力の限り、俺と纈纈に悪態をついている。

「こんな時、本当に『声』とやらが聞こえるなら大変だな。」

「ああ、纈纈下手くそって全員に言われているぞ。」

「余計な御世話だ。」

散々わめかれながら採血をして、残るは荘太のみとなった。

さすがに1歳になっていただけあって、荘太のキツク力は半端ではなく、一人では押さえきれないため、ほかの看護師に力を借りる。

『うわあ！放せ放せ！やめろ！痛い！』

いつも冷静な荘太が泣いている。

……荘太の弱点は、採血か。

朝の採血紛争が終わり、戦い疲れたベビーたちは、皆、同じ向きに頭を傾けて眠っていた。

微笑ましい光景の中、電話が鳴った。
とっさに受話器を取った。

「はい、NICU笹岡です。はい、は……え？採り直しですか？」
一瞬、ベビー全員がビクツと動いたような気がした。

「わかりました。採り直して、検査室に送ります。」

視線の先にいた纈纈が不安げな顔をしてこちらを見ている。

「纈纈……。」

「採り直しか？」

「ああ。」

今、すごく、背後に視線を感じる！

すっごく奴らがこっちを見てる！

ベビーたちのところに歩み寄る俺たち。

ベビーたちは、固唾をのんでその様子を見守っている。

「莊太、もう一回採血だ！」

『俺かよー！』

採血ウォーズ（後書き）

前話、今回、そして次話は、笹岡君の夜勤、夜勤明けの一連の流れなのですが、うまく繋げられなかったので、三部構成とさせていただきます。

翠先生

「笹岡、初夜勤お疲れ、帰っていいぞ。」

採血のアシストを終えた俺に、主任が言った。

日勤の看護師に引き継いでいると、不意に、背後のベビーたちが騒がしくなった。

『翠先生だ！』

『翠先生どうしたの？』

『私に会いに来たの？』

『オムツ替えてくれるの？』

ああ、いつぞやにべろんべろんに酔っぱらっていた翠先生だ。

「あ、いたいた！」

俺と目があつた瞬間笑顔で駆け寄ってきた翠先生。

いやあ、あの時のべろんべろんだったとは思えないほど爽やかな笑顔っすね、先生。

「夜勤明け？」

翠先生が、俺を覗き込んで聞いてきた。

「はい。」

この前見たときは、肩にのしかかられていたし、あまりにもべろんべろんでよくわからなかったけれど、翠先生は人懐っこそうな可愛らしい顔つきをしている。

「今、ちょっと、時間ある？」

そして今、俺は、翠先生に連れられて、産婦人科病棟にいる。

「みど……じゃなくて谷岡先生、お仕事はいいんですか？」

「だって、病棟当番だもん！」

……だもん、って先生、俺より年上ですよね？

翠先生と俺は産婦人科病棟を突き進み、新生児室へとやってきた。確かに、ここは産婦人科病棟内だから仕事してることになる……のか？

『ママ、どこ？』

『翠先生だ！』

『翠先生だ！』

『翠先生、それ、ダレ？』

『カレシ？』

『弟？』

『お兄ちゃん？』

『お父さん？』

『お母さん？』

『おじいちゃん！』

……お兄ちゃんまでは許してやるわ。

さすがは新生児室。

元気な『声』と、泣き声のコラボレーションで、うるさいことこの上ない。

「ねえ、」

翠先生の声が出て、そちらを見ると、すごく近くに翠先生の顔があった。

心臓によくないです、先生。

翠先生は顔を近づけたまま、囁くように言った。

「この間の話って本当？」

……この間の話？

『ラブラブだぞ。』

『ラブラブだな。』

『R - 18 指定ってやつか？』

『18 歳未満はダメなのか？』

『じゃあ、俺ら全員ダメじゃん！』

『違うよ、18 週未満がダメなんだよ！』

『何だよ、俺ら全員OKじゃん！』

目の前でうるさすぎる奴らと、近すぎる翠先生によって思考が遮られていたため、少し時間がかかったが、俺は、ようやく思い出した。

「この間って、あの、翠先生がべろんべ……。」「不意に口を塞がれた。」

「その時の状況は、今、関係ないでしょ！」

翠先生、近すぎです！

でも、目が怖いです！

それにしても、あれだけ酔っぱらっていたのに、よく覚えているもんだな。

変なところに感心していると、翠先生が、さっきの距離感のまま聞いてきた。

「で、どうなの？」

その目は、すごく真剣だ。

『声』が、本当に、聞こえるのか。

そんなことをこんなに真剣に質問されたのは、生まれて初めてだった。

自分で隠していたこともあるけれども、普通は、そんな得体のしれない現象、信じてなどくれないからだ。

翠先生は、『声』の存在を信じてくれるだろうか？

俺は、翠先生を信じて、真実を話すべきだろうか？

信じてほしいけれども、信じてもらえるはずなどない。

真実を話したところで、からかわれていた時に、傷つくのは自分だけだ。

「谷岡先生が、思っている通りだと思います。」

俺は、先生の目を見つめ返した。

思いたいように思えばいい。

信じてくれたって、信じてくれなくなったら、俺は、構わない。

少しの間、押し黙っていた翠先生が、口を開いた。

「じゃあ、私の希望的観測の通りってことね。」

……希望的観測？

「じゃあ、笹岡君、その子、何言ってるか、教えて？」

「『声』ですか？」

「もちろん。」

俺は、少し困惑した。

翠先生は、本当に『声』が聞こえるのかどうか、確かめ始めたの

だ。

ひとしきり、ベビーたちの『声』と、胎児の『声』を翻訳させた翠先生は、一人でうなずいた。

そして、ナースステーションに一声かけると、外へ出て行った。

……先生、仕事は？

病院の中庭のベンチに腰かけた翠先生は、

「笹岡君、奢ってあげるからコーヒー買ってきて。」
と、小悪魔的な微笑みで言った。

……夜勤明けの俺をパシリにする気ですか？先生！

とは思ったものの、小悪魔的な微笑みにあっさりと負けた俺は、
自販機へと走って行った。

コーヒーを二つ、手に持って振り返ると、翠先生は何だか考え込んで
いるようだった。

「先生？」

「あ、ありがと。」

何だか気のない返事だ。

そこに突っ立っているのも何だかおかしいので、先生の隣に腰か
ける。

……

今朝の採血阻止作戦も、荘太が言い出したようだった。
深夜のシヨックが抜けきらなかったベビーたちを思っ
ての行動だったんだろう。

「そっかあ、ちゃんと、良い子に育ってるんだ。
先生が、少し穏やかな表情になって言った。」

……

……

……

何故か、またしても沈黙が訪れている。

再びうつむいた翠先生は、空になった紙コップを握りしめていた。
意を決したかのように紙コップを押し潰し、顔を上げた翠先生は
まっすぐに俺を見て言った。

「荘ちゃん、は、さ、お母さんの事とか何か言ってる?」

荘太のお母さん。

荘太がNICUで頑張っているにもかかわらず、次なる子供を身
ごもった女性。

俺の中での印象は、最悪だ。

でも、荘太は……。

「莊太は……。」

「莊太から、莊太のお母さんの話は、あまり聞いたことがないです。」

「翠先生は明らかに落胆した。」

「けど、俺が見る限りでは、莊太は、お母さんのこと、大好きなんだと思います。」

「ホントに？恨んだりとか、怒ったりとか、してないの？」

「はい、あいつが母親のことを悪く言うのを聞いたことはないです。」

「そっかあ。」

「……。」

「……。」

「……。」

翠先生はまた考え込んでいる。

俺も、聞きたいことがあるけれど、聞いていいのかどうなのかわからない。

傍から見たら気まずいどころか別れ話でも切り出しているような重苦しい空気に包まれていた。

「ねえ、」

話を切り出したのは翠先生だった。

「莊ちゃんはさ、その、お母さんの、に、妊娠の事、知ってるの？」
先生は、顔を上げない。

誰が悪いわけでもないというのに、まるで先生が悪いことをしたみたいだ。

「知ってますよ。先日、荘太の誕生日の日に、父親が報告しに来ました。」

翠先生は、押し潰された紙コップをギュッと握りしめた。うつむいたままで、先生は話す。

「荘ちゃんは……何て？」

「『仕方ない』って。」

「そう、言ったの？」

翠先生は、目を丸くしてこちらを見た。

「仕方ない……かあ。」

先生は空を見上げた。

まだ梅雨入り前の空は青く晴れ渡っていた。

先生の頬に一筋のしずくが流れ落ちた。

「荘ちゃんは、私が思っているよりもずっと、わかってるんだね、色々なこと。」

先生の目からどんどん涙が溢れている。

「あの小さな体で、すべてを受け止めてたんだね。」

その、独り言とも荘太へのメッセージとも取れる言葉は、青空に吸い込まれていく。

「それでもお母さんを大好きでいてくれる荘ちゃんは、優しい子だね。」

一人で納得して、涙を拭って立ち上がった先生は、俺に手を振って、院内へと姿を消した。

呆然と立ち尽くす俺。

翠先生が優しくすぎるのか、荘太を取り巻く環境が厳しすぎるのかは俺には分からなかった。

不意に、背後から肩を掴まれた。

入院患者の見知らぬおじさん。

「別れ話のもつれか知らんが、あんなべっぴん先生を泣かせちゃいかんよ、兄ちゃん。」

……違います！

大物の予感

静かに眠る、谷崎ベビー。

……の、傍らに、検査技師。

退院前恒例の聴力検査が始まるうとしているが、谷崎は微動だにしない。

谷崎が爆睡してくれているおかげで、順調に検査が始まったようだ。

ところが、検査技師は、首を傾げ、納得のいかない様子だ。

谷崎は、いつも、ちゃんと母親の声を聞きとっているから、聞かえていない、ということはないはずなのだが……。

谷崎の右耳を覗き込んだ検査技師は、慌ててこちらに駆け寄ってきた。

「あの……。」

申し訳なさそうに話しかけられて振り返る。

「谷崎ベビーちゃんのお耳の掃除、してもらってもよろしいですか？」

谷崎ベビーの右耳を覗き込むと、溜りに溜まった耳垢が、小宇宙を形成していた。

濡らしたガーゼで耳垢の撤去作業に入る。

『おっ、』

谷崎は一瞬ビクツと動いた。

起きるのか？

……起きる様子がないので、俺は、作業を続けた。

『おお？』

谷崎の中途半端に上がった右手がビクツと動いた。
やっぱり起きるのか？

……………やはり起きなかったので、俺は、再び作業に戻った。

『うおっほーい！』

何だその掛け声は！

谷崎が左腕を突き出した。

……………起きてしまうのか？

『……………ZZZ……………』

あ、やっぱり寝た。

再び深い眠りに落ちた谷崎は、とても満ちたりた顔をしていた。

さて、耳掃除が終了したことを、検査技師に伝えなくては。

居場所はなんとなく想像がついていた。

さつきから、あいつらがうるさかったから。

『ねえねえ、お姉ちゃん、ボクと遊ばない？』

『お姉ちゃん、ボクとも遊んで！』

『お姉ちゃん、パンツ何色？』

『すりーさいずは？』

この、セクハラ双子はつい先日入院してきた。

どこをどう間違えると、あの天使のような顔からセクハラワード
が飛び出すようになるんだ……………。

「耳掃除、終わりました。」

「はい、ありがとうございます。」

検査技師は谷崎の元へと去って行った。

『笹岡、邪魔するなよ、いいとこだったのに!』

『すりーさいず、聞きそびれたじゃないか!』

……お前ら、おっさんか?

『ねえねえ、すりーさいず、つて、何?』

セクハラ双子と時期を同じくして入院してきた、湯川ベビーは、天使のような見た目を裏切らない純粹さを持っている。

ぜひと君は、そのままできてくれ!

『湯川、おまえ、そんなことも知らないのかよ?』

『世間知らずだなあ。』

世間知らずも何も、お前らはこの世に出てきたばかりだろうが!

『すりーさいず、つてのは、ぼん・きゅっ・ぼん、のサイズだぞ!』

『女の子には、必ず聞かなきゃいけないんだぞ!』

……何かが確実に違う!

湯川、頼むからあいつらの色には染まるなよ!

『ぼん・きゅっ・ぼん、つて何?』

セクハラブラザーズに質問すると、何故だか猛攻撃に遭うことを学習した湯川ベビーは、隣のベットのさやかに話しかけた。

『別に、今じゃなくても、そのうちイヤでもわかる日が来るわよ。』
相変わらず、さやかはドライだ。

『でも、今、知りたい。』

でも、湯川は結構頑固なので、そんなことではめげない。

『双子が言うほど大したことじゃないわよ。』

『でも、気になるもん! さやかちゃん、知ってるんでしょ?』

『まあ、知ってるけど……。』

『じゃあ、教えてよ! ねえ! 教えて教えて!』

湯川がぐずりだした。

そんな、ぐずるほどの内容じゃないぞ！

『わかった、教えるから。』
とうとう、さやかが折れた。

そんなやり取りを見ているうちに、右耳がきれいになった谷崎の、聴力検査が終わったようだった。

「ごめんね、ちょっと、イタイよ！」

検査技師が、谷崎に強力に張り付いたテープをはがし始めた。

このテープが、なかなか強力なようで、大抵のベビーはテープを剥がされた瞬間に泣き出す。

『むっ！』

谷崎が顔をしかめた。

それほどに、テープが強力に貼りついていたのだ。

『……………』

泣くのか？

『……………』

泣くのか？

『……………』

泣いてしまうのか？

『……………ZZZ……………』

って、寝るんかい！

コイツは将来大物になる。
なぜだかそんな予感がした。

パンツ論争

「はい、チーズ！」

最近、翠先生がよくベビーたちの写真を撮りに来る。

『翠先生、何それ？何それ？』

初めて見るデジカメにびっくりしている湯川ベビーを写真に撮ると、翠先生は早速写真を見直した。

「どれどれ、おやおや、崇くん、おめめくりっくりだね！」

『ボク、栗じゃないよ！崇だよ！』

「今、崇くんは、何か『言っつて』た？」

「ボク、栗じゃないよ、崇だよつて。」

そして、翠先生は、たいてい俺に『通訳』をさせる。

からかわれているんだか、本当に信じてもらえていているんだか……。翠先生は、そんな俺の考えなどお構いなしに、隣のベッドのさやかのところへと向かった。

「さやかちゃん、はい、チーズ！」

『先生、可愛く撮つてね！』

さやかは絶妙なタイミングで満面の笑みを見せた。

ある意味、すごい才能だ。

「さやかちゃん、可愛い！すごい！私、ベストショット撮っちゃった！」

『当然よ！ここ数か月間ずっとさりげなく一番いいタイミングで微笑む練習してたんだから！』

親が知ったら切なくなりそうだな。

「笹岡君、さやかちゃんは、何か言ってた？」
「ここにももう一人、切なくなりそうな人がいた！」
「えっと、あの、その、可愛く撮ってくれてありがとうって……。」
一瞬、先生は、疑惑の眼差しをこちらに投げかけてきた様な気がしたが、先生のほうを見ると、すでに、荘太にカメラを向けていた。

「荘ちゃんも、撮っていい？」

「って、もう、撮り始めてますよね。」

「今、ぐっすり眠っているんで、どうぞ。」

「って、もう、撮り始めてますよね。」

「ほんとにぐっすり寝てるね。」

そう言いながらも、何度かシャッターを押したのち、

「よし、荘ちゃんの寝顔、ゲット！」

と、翠先生は、満足げに病棟を去って行った。

「ねえねえ、さやかちゃん、翠先生は何してたの？」

「聞きたがり屋の祟が隣のさやかに話しかけた。」

「写真を撮ってたの。」

「じゃしん？何、それ？」

「うーん、写真っていうのはね、何って言ったらいいかな？」

大人の俺でも困るような質問をされて、さやかは言葉に詰まっていた。

「さやかは少し考えてから話し始めた。」

「例えば、祟が今、目の前にある景色と全く同じものを見たいとするでしょ？」

「うん。」

「そんな時に、写真、を撮ると、その景色と全く同じ景色が、明日も、明後日も、いつでも見れるのよ。」

「すすいー！」

崇は目をキラキラさせている。

少しの間、大人しくしていた崇が思いついたように言った。

『それって、写真、って、誰かの顔とかも何回も見れるの？』

『そうよ、だからさつき、翠先生も……』

『じゃあさ、じゃあさ、皆が退院して離れ離れになっちゃっても、皆の、写真、があつたら寂しくないね！』

『そうかしら、でも……』

『あーっ！』

『しまった！』

さやかの話は、中断させられた。

『翠先生にパンツの色聞くの忘れてた！』

『ボクも、忘れてた！』

……セクハラ双子によつて。

『……あんたらねえ。』

さやかは呆れている。

『おい！崇、お前も聞き忘れてたろ！ダメだぞ！』

『そうだぞ、女の人を見たらまず、パンツの色を聞くんだぞ！』

『あ、ごめん。』

セクハラ双子よ、純真無垢な崇に変なことを教え込むなよ。

『ちよつと、そのセクハラ双子！』

とうとう耐えかねたのか、さやかが『声』をあげた。

『あんたら、いいかげんにしなさいよ！』

いいぞ、さやか、頑張れ！

『崇も、アイツらの言うこと信じなくていいから。』

『そうなの？』

『当たり前よ。』

えらいぞ、さやか！

『さやかっつてば、女の子なのに自分のパンツの色聞いてもらえないからって拗ねちゃって！』

絶対違うと思う。

『さやかのパンツは何色なの？』

……しかも聞いている！

さやかは、ため息まじりに言った。

『あんたらと同じ、オムツよ。』

そりゃあ、そうだ。

『……。』

『……。』

『……なんか、ごめん。』

『……ホント、ごめん。』

セクハラ双子が謝った！

さすが、さやか！

これにて一件落着かと思いきや、ものすごく不服そうなベビーが一人いた。

『ひどい！』

それは、崇だ。

『ボクが一番最初にさやかちゃんのパンツの色聞きたかったのに！』
いや、それ、聞いても、さっき残念な結果を目撃しただろう？

『楽しみにしてたのに！』

『崇、そんなに怒ることじゃないでしょ？』

さやかが少し慌てた様子で言った。

『崇にも、パンツの色教えるから！』

『でも、一番が良かったんだもん！先に森田2君が聞いてちゃったんだもん！』

崇がぐずり始めた。

『崇、泣いちゃダメ！』

『だって、だって……！』

『崇、崇、聞いて！』

今にも泣きだしそうな崇に、さやかが慌てて言った。

『今度、崇にだけ、私のスリーサイズ、教えるから！』

うーん、見た感じ、B40、W40、H40でどこか？

……って、そんな聞いても嬉しくないだろ！

『ホントに？』

あ、崇、機嫌なおった。

ほんの少しだけ、崇の将来が不安になった昼下がりだった。

泣かないで

双子のベッドの間に、双子のママが座っている。溢れんばかりの笑顔で母親の気を引こうともぞもぞ動く双子。実際に、微笑ましい光景だ。

……あいつらの『声』が聞こえなければ。

『ママ、ママ！』

「あら、どうしたの？」

もぞもぞ動く森田1児を母親が抱っこした。

『また、おっぱい大きくなった？』

『声』が聞こえていない母親は、そのまま森田1児をあやしている。

『ママ、ママ！』

「あらあら、どうしたの？」

今度は森田2児がもぞもぞしだして、母親は2児のほうを抱っこした。

『今、何かアップ？』

母親は、まさかそんな『セクハラ発言』が飛び出しているとは知らずに、2児をあやしている。

母親に対してまでセクハラ発言全開ってというのは、ある意味すごいのかも知れない。

そんな森田親子に感心しているうちに面会時間が終了した。面会者たちは帰っていき、残った大人は職員だけとなった。

『ねえねえ、』

崇が誰にともなく話しかけた。

『何で、荘ちゃんママは来ないの？』

一瞬、全員が言葉を失ったのを感じた。

たとえそのことを気にかけていたとしても、誰もが心のどこかで聞いてはいけなさと感じて聞けないうた質問を、崇はいとも簡単に言っただけでしまったのだった。

『俺の母親は、ちょっと、病気なんだ。』

気まずい沈黙を破ったのは、質問をされた荘太だった。

『ボクのママは、車椅子に乗ってでも来てくれたよ！』

崇は一步も引かない。

病気でも、何でも、母親に来てほしい。

その顔が見たい。

その手で触れてほしい。

それは、ベビーの誰もが抱いている想い。

そんな想いを荘太だって抱いているに違いない。

きつと、崇は荘太を思っただけでいる。

でも、これ以上言わないでくれ。

これ以上、荘太に悲しい現実を、突きつけなくてやってくれ。

『崇、荘ちゃんは……。』

言い返せないでいる荘太をさやかが必死でフォローする。

『荘ちゃんだけ、ママが来ないなんてかわいそうだよ！』

『崇！』

崇はとうとう泣き出してしまった。

荘太が素直に泣けない分、崇が泣いてくれているんじゃないかと思っただけ。

『笹岡！何ボケツとしてるの！抱っこ！』

急にさやかにすごい剣幕で言われて、とっさにさやかを抱っこした。

『バカ！違う！崇を抱っこして！』

……0歳児にバカって言われた。

少しへこみながら、崇の元へ行った俺は、本当に、自分は大馬鹿者だと思った。

崇の唇、そして指先は紫色になっていた。

崇はチアノーゼを起こしていたのだ。

さやかよりも重い心臓病を患っている崇は、泣くとチアノーゼを起こすのだ。

だから、さやかはいつも、崇が泣かないように気を付けていたんだ。

先輩看護師から、散々、気を付けるように言われていたのに……。0歳児よりも気の利かない自分に嫌気がさした。

それでも、へこんでいる場合じゃない。

とにかく、崇がこのまま泣き続けたら状況は悪化する一方だ。抱っこして、なんとか落ち着かせようとした。

驚いた様子の荘太。

心配そうに見守るさやか。

しばらくして、やっと、崇は落ち着いて、眠り始めた。

『俺の分まで泣いてくれて、ありがとな。』

静かになった部屋で、荘太がそつと言った。

やがて、全員が眠ってしまい、静かになったNICU。

出入り口のところから『声』が聞こえた。
……何で、そんなところから？

出入り口へと向かった俺は、NICUのインターホンの前でしゃがみこむ女性を見つけた。

『声』は彼女のお腹の中から聞こえてきていた。

『ママ？どうしたの？気持ち悪いの？』

「どうかされましたか？」

声をかけたとたんに、女性は走り去って行ってしまった。

……妊婦が、猛ダツシュしないでください。

それにしても、さっきの『声』、すごく荘太の『声』に似てた。

……もしかして、さっきの妊婦！

荘太、荘太のママはすぐそばまで来ていたかもしれないよ！

NICUに戻ると、双子が起きていた。

『おう、笹岡、ママが何カップか聞いてきてくれたのか？』

……頼まれたって、聞きません！

想いよ届け

「あら、紗代ちゃん、今日はゴキゲンさんだねえ。」

『翠先生、私、すごく元気になったよ！遊んで、遊んで！』

翠先生は、たまにふらつとNICUのベビーたちの様子を見に来ることがある。

最近では、写真を撮りに来ることもあるせいか、その回数が増えた気がする。

「……………」

「笹岡君？」

「あ、すごく元気になったよ、遊んでつて言ってます。」

「そっかあ、元気になったかあ。あんなに小さかった紗代ちゃんがこんなに大きくなって、元気になったんだもんね。」

そして、俺は、相変わらず『通訳』をさせられている。

翠先生が、本気で『声』の存在を信じてくれているのか、あれからずっとからかい続けているのかはわからない。

たとえからかわれていたとしても、俺にとっては、唯一、翠先生だけが『声』の話にちゃんと耳を傾けてくれる存在だ。

だから、翠先生が、こうしてNICUに足を運んでくれることが、嬉しかったりする。

「ねえ、笹岡君、」

でも、たまに、その近さが心臓によくありません。

「NICU出る前に、もう一度荘ちゃん見てっついていい？」

「……………」

……………その、小悪魔スマイルも。

荘太の顔を見た翠先生は満足そうな足取りで去っていった。

『ねえねえ、』

崇が『声』を発した。

『笹岡つて、翠先生のこと、好きなの？』

……急に、直球な質問来ましたけど？

『笹岡、翠先生と話してるとき、すごく楽しそうだけど、翠先生のこと、好きなの？』

黙っている俺に、崇が再び聞いてきた。

確かに、翠先生といるのは楽しい。

俺が『声』が聞こえることを、否定するわけでも、無視するわけでもなく、話を聞いてくれる翠先生は、俺にとって、かけがえのない存在だ。

この想いになんとという名前を付けるべきか、俺は、知っている。

でも、その想いに、名前を付けてはいけない。

その想いを、認識してはいけない。

相手は敏腕美人産婦人科医。

そして俺はヘタレ看護師。

かなうはずなどない想いに、名前は付けてはいけない。

『ねえねえ、翠先生に好きって言わないの？』

答えに困っている俺に、さらに崇が質問してきた。

「言えるわけないだろ、そんなこと。」

それを言ってしまったら、その気持ちを伝えてしまったら、今までの関係がなくなってしまうかもしれない。

俺には、そんな、勇気はない。

『ボクは、好き、の気持ちはちゃんと伝えたい。』

崇の『声』が心に響いた。

『それは、ボクにとって特別な、好き、だから。』

特別な、好き、か。
家族とも友達とも違う、特別な、好き。
大きくなったら、人はそれを、恋、と呼ぶ。

『ボクは、‘今’を生きているから、‘今’の気持ちを伝えたいんだ。』

‘今’の、気持ち……。

『ボクには、‘今’しかないから。』

心臓が悪い崇だけではない。誰だって、‘未来’の確約などない。

『だから、伝えたいんだ。伝えなくちゃいけないんだ。』
だから……伝える。

『離れ離れになる前に。』

夜のNICUは静かに更けていた。

俺以外の当直看護師はナースステーションで看護記録をまとめていた。

ベビーたちも寝静まり、起きているのは崇だけだった。

静かなNICUに、崇の『声』だけが響き渡った。

『ボクは、さやかちゃんのが、好きだよ。』

崇の隣のベッドで眠るさやかは、退院を来週に控えていた。

『ねえ、笹岡は、好き、の気持ち、伝えないの？』

崇が俺に問いかけた。

「どう……したいんだろうな？」

俺も俺に問いかけた。

やがて、崇も眠りについた。

静けさの中に、1人取り残された俺。

崇の言葉を反芻した。

‘今’を、生きているから……。

‘今’しかないから……。

‘今’の、俺の想いは……。

夜が明けた。

「皆、おはよう！」

翠先生が早朝から現れた。

寝ぼけていたのか白衣のボタンを掛け違えている。

……ていうか、先生、勤務先は産婦人科ですよね？

『笹岡、言わないの?』

崇が俺に言った。

俺は、昨晚の崇の話を思い出した。

俺は……。

俺の、今の想いは……。

「翠先生、好きです!」

翠先生が、びっくりした様子でこちらを見た。
起き始めたベビーたちも、驚いているようだった。

『笹岡?』

あれ?なんで、崇がきょとんとしてるんだ?
だって、崇が……。

『ボタン掛け違えてるって教えてあげないの?』

……そっちか!

幸せを……

「あ、いや、えっと、あ、あの、あと、ボタン掛け違えてます！」
俺はしどろもどろに言った。

「あ、あれ？ホントだ！ありがとう！」

翠先生は、そう言うと、ドアにぶつかりながら出て行った。

『笹岡、告白か？』

『とつとつ言っちゃったか！』

『やっちゃまったな。』

『ドンマイ。』

『ドンマイ。』

『元気出せって。』

『フラれたからってヤケになっちゃだめよ！』

……一応、まだ、フラれてない。

まあ、時間の問題か。

ベビーたちが俺をからかうのに夢中になっているうちに採血担当の小児科医がやってきた。

……なんか、今日、小児科医の人数多くないか？

……見慣れない先生もいる。

たくさんの小児科医が一番に向かった先を見て、俺は、今日が何の日か思い出した。

今日は、崇のオペの日だ。

一番最初に採血をされて大泣きをした崇は、涙が収まるとともに、話しかけた。

『ねえ、さやかちゃん、』

崇のオペだけでなく、ベビーの緊急搬送やら、母体搬送やらが相次ぎ、人手不足のために、夜勤明けの俺も帰れずに、とうとう夕方になってしまった。

崇のオペが終わったようだった。

ナースステーションの電話が鳴った。

果たして、手術は成功したのか？

俺は、その結末に気付いていた。

電話が鳴るよりもずっと前から、崇の『悲鳴』が聞こえていたか
ら。

『うわああああっ！』

その『悲鳴』がどういうものなのか、知っているベビーもいる。

さやかも、その一人だ。

今は、衝撃のあまりに言葉になっていないようだった。

『死にたくないよ、死にたくないよ……。』

俺は、この状態から助かったベビーを、一人も見ることがない。でも、奇跡を、奇跡が起きることを、信じたい。

崇の両親がNICUに入ってきた。

『パパ、ママ、生きたいよ、もっと一緒にいたいよ！』

『崇、生きてくれ！』

『さやか、返事を聞くんだろ！』

『元気になって戻ってくるって言っただろ！』

『崇、頑張れよ！』

『崇くん、生きて！』

『ベビーたちは一生懸命、崇を励ましている。』

『死にたくないよ、死にたくないよ……。』

『それでも、崇の『悲鳴』は、止まない。』

『崇、死ぬな！』

『崇、諦めるなよ！』

『うわああああああっ！』

『必死の心肺蘇生が続いている。』

『崇、あたし……。』

『さやかが何か言おうとした。』

『ちょうどその時、小児外科医が纈纈に何か耳打ちした。』

『纈纈が崇の両親に話しかけた。』

『大変申し上げにくいのですが……。』

『その表情は暗い。』

『これ以上続けても回復の見込みは……。』

『その時だった。』

『さやか！』

『『悲鳴』を上げながら、崇が力いっぱい叫んだ名前は、ママでも』

パパでもなく、さやかだった。

さやかが一瞬ビクツと動いた。

『さやか！ボクに分まで生きて！』

崇は気付いたのだ。

『世界一幸せになって！』

自分の命の灯火が消えようとしていることに。

隣のベッドのさやかは静かに泣いていた。

蘇生の手が止まった。

両親は泣き崩れた。

崇の両親の嗚咽が響き渡るNICUで、崇の『声』が心に響いた。

『パパ、ママ、ボク生まれてきて幸せだったよ。』

崇は、最後の力を振り絞り、一言一言『言葉』を綴った。

『さやかに出会えて、幸せだったよ。』

さやかは、じっと、崇の『声』を聞いていた。

『さやか、ボクは、君の幸せを……。』

プー

無情に鳴り響く機械音。

午後6時23分、湯川崇は1か月足らずの短い生涯に幕を降ろした。

君の偽物

長かった一日が終わって、新しい朝がやってきた。
もう、さやか隣の隣のベッドに、崇はいない。

崇の手術はすごく難しく、成功率が低いものだったと後から聞かされた。

『なあ、元気出せよ！』

『泣くなつて！』

『元気出しなさいよ、紗代。』

紗代は、昨日の衝撃がいまだに忘れられないようだった。

『だって、だって、崇君、昨日の朝まであんなに元気に……。』

紗代はしくしく泣いている。

『崇は幸せだったって言ったんだからさ、』

莊太までもが励ましの言葉を言っている。

『でも、さやかちゃんを置いていくなんて、さやかちゃんが可哀想だよ！』

紗代の涙は止まらない。

『さやかちゃんに二度と彼氏ができないかもしれないよ！』

『紗代、あんた、ケンカ売ってる？』

さやかは気丈に振る舞っていた。

それでもやはり、時折寂しそうな様子が垣間見えた。

昼休みになって、廊下を歩いていると、向こうから翠先生が歩いてきていた。

先生が手にしているものを見て、あることを思いついた俺は、先生のもとへ駆け寄った。

ところが、俺を見て踵を返す翠先生。

何で引き返すんですか？

何で、そんな猛ダツシユなんですか？

……。

……。

……あっ！

やっとのことで、俺は、昨日勢いで告白したことを思い出した。

思わしくない結果になることは予想がついている。

でも、とりあえず、先生、逃げないでください！

俺が、ストーカーみたいですから！

何とか先生に追いついた俺は、翠先生に事情を説明した。

「何だあ、そういうことか、私につきり……。」

そこまで言っつて、先生は慌てて口をつぐんで、自分のデスクへと走って行った。

翠先生からもらった‘ある物’を手に、NICUへと戻った。

さやかのところへ歩み寄り、‘それ’をそっと目の前に出した。

‘それ’は、崇の写真だった。

翠先生のデジカメを見た俺は、ある時の崇の言葉を思い出していた。

それは、生まれて初めて写真を撮られた崇に、写真がどういふものかをさやかが、説明した時だった。

崇は、目をキラキラ輝かせて言った。

『離れ離れになっちゃっても、皆の写真があつたら、寂しくないね。』

さやかも、あの時の崇の言葉を覚えているんじゃないだろうか？
写真には、あの日の崇が写っているから。

二人は離れ離れになってしまったけど、傍にいるような気がするんじゃないだろうか？

寂しさが、少しは紛れるんじゃないだろうか？

しばらく写真をじっと見ていたさやかは、目を伏せた。

『でも……』

小さな『声』で、さやかはつぶやいた。

『でも、それでも、やっぱり寂しいよ。そこにいるのは、本物の崇じゃないから、やっぱり、寂しいよ。』

そして、さやかは静かに泣いた。

さやかの傍らに置かれた写真の中の崇は、何でさやかが泣いているのかわからないかのように目を丸くしていた。

それから数日が経ち、さやかの退院の日になった。

偶然にも、大親友の紗代も一緒に退院だ。

『元気だな!』

『戻ってくるなよ!』

『皆、ありがとう!』

『さやか、いい人見つかるといいな!』

『ありがとう、でも、余計なお世話。』

ベビーたちはそれぞれに別れの挨拶をしていた。

別れの挨拶が一段落したときに、ふと、紗代がさやかに話しかけた。

『さやかちゃん、もう、大丈夫?』

『当たり前よ!』

さやかは、すっかりとした『声』で言った。

『だって、宇宙一幸せになってやるんだもの、くよくよなんかしてられないわよ。』

さやかは、その悲しみを乗り越えたのだろうか?

それとも、強がっているだけなのだろうか?

いずれにしても、さやかが自分の口から言葉を発するようになった時、さやかはここでの出来事を忘れてしまうのだろうか。

崇との思い出も。

悲しい別れがあったことも。

HELLO! BABY!

NICUに配属されて半年が経過した。

その間にベビーたちの入れ替わりも結構あつて、俺が配属されたその日からいるベビーは荘太だけになっていた。

今日も、ベビーの入院があるようだ。

NICUの扉が開き、ベビーが入ってきた。

『Hello!』

……外人さんだ!

ちなみに言っておくが、俺は、英語が苦手だ。

『よっ?』

『何だ何だ?』

『ハロー?』

『はろっ?』

『はるお?』

……こいつらよりはましなレベルだと思うが。

『Hello!』

そんな中、一人、めっちゃいい発音で返事したのは、荘太だった。

『My name is Sara. Nice to meet you!』

ちなみに言っておくが、俺は英語が苦手だ。

『ん?何て言った?』

『わからん!』

『もう一回言って!』

ほら、こいつらにだってわからない。

『My name is Sota. Nice to meet you, too!』

ちなみにくどいようだが、俺は英語が……って、今の、荘太か？
またしても荘太が流暢な英語を披露していた。

荘太は、驚いているベビーたちに、説明した。

『私の名前はサラ。初めましてって言われたから、俺の名前は荘太、初めましてって答えたんだ。』

荘太よ、お前は本当に1歳か？

『荘ちゃん、すごーい!』

『ボクも、名前覚えてほしい!』

『私も!』

『アイツの言葉、覚えたい!』

自分たちにとって、わけのわからないものに対して、拒絶することなく、素直に興味を示せる好奇心。

大人はどこに落としてきてしまったんだろう？

大人がみんな、こいつらみたいに友好的でいられたら、世界はどれだけ平和になっているのだろうか？

ふと、サラの隣のベッドの梓が聞いた。

『何で荘ちゃんは、サラの言葉がわかるの?』

『俺が母親のお腹の中にいた時に、母親が英語の勉強をさせられていたからだろうな。』

……胎教、恐るべし。

もつとも、恐れるべきものは、荘太の能力なのかもしれない。

『うちのママ、お笑いと昼ドラと韓流ドラマしか見てなかったからなあ。』

『じゃあ、韓国語とか覚えたのか？』

『ヨン様とか？』

……それは、日本語だ。

入院したその日のうちに、サラはすっかり日本のNICUに溶け込んでいた。

『ササオカ！Milk!』

『おおっ！サラがミルクって言ったぞ！日本語覚えたんだな！』
日本語でも英語でも、ミルクはミルクだ。

『ササオカ！オムツ!』

どうやら、オムツという単語も覚えてくれたようだ。
その方が、俺としても助かる。

「今日、入院あつただろ、おっ！この子か！」

纈纈がベビーたちの様子を見にやってきた。

嬉しそうに纈纈を見つめるサラに、隣のベッドの梓が耳打ちするかのように小さな『声』で言った。

『纈纈、イケメン。』

『Oh！コーケツ、イケメン doctor!』

……和洋折衷？

纈纈を見つめ続けたサラは、ちらりと俺のほうを見て、纈纈に視

線を戻しながら言った。

「ササオカ、ザンネン……。」

残念で悪かったな！

違和感

サラの入院から数日経った。

『サラちゃんはどこから来たの?』

『America!』

サラは結構日本語を理解するようになってきた。

『アメリカ楽しい?』

『ワカラナイ!』

多少は日本語も話すようになった。

『ボクもアメリカ行ってみたいな!』

『ナンデヤネン!』

多少はツッコミなんかも入れるようになったりして。

『何か、アメリカって響きがカッコイイじゃん!』

『ドコガヤネン!』

まあまあ、ツッコミなんかも入れるようになったりして。

『だって、サラちゃんみたいなのが可愛いくてスタイルのいい子もいっぱいいるんですよ?』

『オウベイカ!』

……ツッコミ、入れすぎじゃありませんか?

『サラちゃん、そのツッコミ、違うわ。』
『ん?ダメ出しか?』

『そういう時はね、どこ見てんのよって言うのよ。』

それもどうかと思うぞ。

『ワカッタ、アズサ、thank you! ドコミテンノヨ!』
どうやら、これまでのサラのツツコミの数々は、梓が教え込んだ
ようだ。

『そうね、サラちゃん、よくできました。』

『アリガトウゴザイマシタ! シシヨー!』
しかも師匠かい!

梓はサラより少し前に入院してきた。

常に明るく元気で、面倒見の良い子だ。
ツツコミの英才教育はどうかと思うが。

そんな梓にふと違和感を感じるときがある。

……ツツコミの英才教育以外で。

いつも、違和感を覚えているような気がするのだが、大抵周りの
喧騒にのみ込まれてうやむやになってしまう。

それほどに騒がしくなるのは、採血や注射の時とか、あるいは…
…。

インターホンが鳴った。

「川嶋です。」

どうやら面会時間になったようだ。

今日は梓の両親が一番乗りだ。

『あーママだ! ママ! ママ!』

「梓、今日も来たよ。」

『ママ！ママ！』

「今日は、パパも来たよ！」

『ママ！ママ！』

……違和感の正体はこれか！

梓は、父親を目の前にしても、『パパ』とは言っていないのだ。

「あず、今日は元気だねえ。」

梓のママは、梓を抱き上げた。

『ママ！ママ！』

梓は、嬉しそうに母親の顔を見た。

「僕も、あず、抱っこしていい？」

NICUに入ってきてからずっとそわそわしていた父親が、母親に話しかけた。

「はい、じゃあ、今度はパパね。」

『ママがいい！ママがいい！』

そんなに父親は梓をひどく扱うのだろうか？

ところが、溢れんばかりの笑顔で梓を受け取った父親は、とても優しく、宝物のように大切に梓を抱っこしていた。

隣で「Sara!」と絶叫しながらサラを振り回しているサラの父親に教えてやってほしいほどだ。

すごくたくさん練習したんだろう、初めての子にもかかわらず、梓の父親の抱っここの仕方にごちなさは感じなかった。

隣で、絶叫した父親からごちなくサラを受け取って落っこしそっになったサラの母親に教えてやってほしいほどだ。

そんなに大切に抱っこされているにもかかわらず、梓は何だか不

機嫌だ。

『ママがいい！ママがいい！』

梓が、ぐずり始めた。

「やっぱり、パパよりママのほうがいいのかな？」

梓、パパ、めっちゃ残念そうだよ！

もっと、喜んであげようよ！

『もう、放してよ、オジサン！』

とうとう、梓は泣き出してしまった。

……え？オジサン？

まさか、この歳にして、反抗期？

『ナンデヤネン！』

……サラさん、絶妙なタイミングでツッコミの練習しないでくだ

さいー。

笹岡君の休日

何だか、不思議な空気になっている。

俺がNICUに入った瞬間から、やたらとベビーたちの視線を感じる。

何だろう？この、責めるでも咎めるでもなく、緊迫しているというわけでもない、とにかく不思議な視線は。

奴らの視線にどう対応していかかわからない俺の背後から、『声』が聞こえてきた。

『笹岡、バーカ！』

『笹岡、あほー！』

『笹岡、ボケ老人！』

『笹岡、老人！』

『笹岡、余分だぞー！』

『ササオカ、バカタレ！』

何が悲しくて、俺はこんなにバカにされているんだろう？

「笹岡君、」

看護師長が俺のところへやってきた。

「今日、お休みだと思っただけど？」

……………ん？

勤務表を確認する。

今日の休み……………笹岡。

……………さて、帰るか。

急に休みになったところで特にやることもなく、病院の近くの公園を歩いていると、背後から声をかけられた。

「笹岡君！」

……翠先生、近いです。

俺、これでも一応あなたに告白した男ですよ。

崇の写真の一件以来、翠先生は告白などなかったかのようにいつも通りに振る舞っている。

俺からしてみれば、生殺しの状態で数か月も続いているのである。それでも嫌いになれないのは、惚れた弱みってやつなのだろう。

ベンチに座るなり、翠先生は五百円玉をこちらに差し出しながら言った。

「笹岡君、缶コーヒー2個、買ってきて！」

そして、小悪魔スマイル。

……前にも、こんなことあったような。

五百円玉を握りしめて駆け出した俺に、背後から「暖かいやつね！」と翠先生の声が聞こえた。

缶コーヒーを先生に手渡した俺は、先生の隣に腰かけた。

目の前を幼稚園ぐらいの少女が父親と手をつないで笑顔で通り過ぎて行った。

「先生、」

その光景を見て何故か梓のことを思い出した俺は、ふと、先生に聞いてみようと思った。

「梓のお父さんって……」

「何で知ってるの？」

先生が瞬時にそういうと、勢いよく振り返った。

……何をですか？

少しの間、振り返ったままの状態で固まっていた先生は、急に慌てふためいた。

「あ、い、今のナシ！今の発言ナシ！今の発言忘れて！さ、話、続けて！」

「梓が、父親のこと、『パパ』じゃなくて、『オジサン』って呼んでたから、何かあったのかな、と、思って……。」

翠先生は、驚いたような、悲しいような、そんな表情でこちらを見ていた。

しばらく呆然としていた翠先生は、急に真面目な顔になった。

先生の顔が近づいてきた。

先生、どとど、どうしたんですか？

あ、あの、心の準備が！

吐息がかかりそうなくらい近すぎる距離感のまま、翠先生は、小さな声で、囁いた。

「ねえ、聞きたい？」

聞きたいって、告白の返事とかですか？

「梓ちゃんのパパのこと。」

そっちですか。

そっちですよね。

よかった、口に出さなくて。

梓の父親のこと、確かに気にはなる。

「聞いても、いいんですか？」

「誰にも言わないって約束してくれるなら。」

俺は、先生の目を見て頷いた。

先生は、目を閉じて、大きく深呼吸した。

風の音以外、周りには何も聞こえない。

ゆっくりと目を開けた先生が、真剣な面持ちで、こちらを向いた。

「梓ちゃんのパパ、不妊症なの。」

夫婦の間に赤ちゃんができない時、女性側に原因がある場合と、男性側に原因がある場合とがあるとは、どこかで聞いたことがあった。

川嶋夫婦の場合は、旦那さんの精子に生殖能がないことが原因だった。

旦那さんの精子では、どう頑張っても、子供は授からない。

そして、川嶋夫婦が選んだのは、精子バンク。

本当の父親は、だれなのか、わからない。

わかっているのは、精子提供者の血液型が、梓の父親と同じ、A型だということだけ。

「私はね、あんなに張り切っているお父さんは、初めて見たの。」

翠先生は哀しげな表情のまま話し続けていた。

「私はね、あんなに頑張っているお父さんは、初めて見たの。」

俺が今までNICUで見た中でも、梓の父親は、一番、子供のた

めに時間を割いていると思う。

「だから、私は、あの一家の秘密を守ろうって思ってるの。」
それで、だれにも言わないように念を押してたのか。

「私が梓ちゃんだったら、真実は、他人の口からじゃなくて、お父さんやお母さんの口から聞きたいと思うもの。」
翠先生は、哀しげな表情をこちらに向けた。

「梓ちゃんのために、あんなに一生懸命になってるのに、それなのに……」
「オジサン」なんだね。」

冷たい風が吹いてきた。

風が吹く中、『声』が聞こえた。

『てめえ、ジロジロ見てんじゃねえぞ！海の藻屑にするぞ！』
ええっ！0歳児なのに尋常じゃないこと言ってる！

『絢佳ちゃん、だめよ、女の子がそんな言葉遣いしちや。』
隣にいる子はまともなようだ。

少し離れたところに二組の親子がいた。
性格が全く正反対の二人のベビーはそれでも仲が良いようだった。

『……惚れた!』

木陰から、鈴村親子が現れた。

鈴村は、どうやらまた、誰かに惚れたらしい。

『お、あっちにいるのは翠先生じゃないか!』

……目ざといな、あいつ。

『その隣にいるのは、あ、なんだ、兄弟か、なら、安心だな。』
何が、どう、安心なんだ?』

ふと、翠先生を見ると、翠先生は鈴村たちとは違う方向を見つめていた。

翠先生につられてそちらを見た。

何だか見たことのある老婆が友人らしき人物数人と話している。

『お、向こうにいるのは荘ちゃんのばあちゃんじゃないか!一回しか見たことないけど。』

鈴村君、説明ありがとう。

君のその視力と、その記憶力は、ある意味すごいと思うよ。

荘太の祖母たちの会話がこちらにも聞こえてきた。

「中山さん、お二人目はもうそろそろですか?」

「ええ、予定日は来月です。」

すごい、セレブっぽい話し口調だ。

『ねえ、絢佳ちゃん、オレの彼女にならない?』

鈴村、そっちに惚れたのか?

『あたい、あんたみたいながキにはキョーミない。』

しかも、フラれた！

今、鈴村が告白しようとフラれようと、かなりどうでもいいのだが、奴らの『会話』は、勝手に聞こえてくる。

「今は肝心な時期ですはねえ。」

セレブ達の会話もまた、耳に入ってくる。

「ええ、ですから、あまり無茶させないようにしておりますわ。家からもなるべく出ないように言いつけておりますし。」

そんなことしたら、莊太の母親は、莊太に会いに来られないじゃないか！

「一人目のお子さんのおようになっちゃね、あら、失礼！」

それは、いくらなんでもひどすぎないか？

まるで、莊太が失敗作みたいに！

『じゃあさ、栞ちゃん、オレの彼女にならない？』

そんなことはお構いなしに、向こうで、あきらめの悪い鈴村がいる。

どうやら、絢かと一緒にいた清楚な雰囲気の子は栞というらしい。

『さすがに私にもプライドってものがあるの。ごめんなさい。』
そして、あっさりフラれていた。

「あら、奥様、気になさらなくてよろしいんですよ。」

莊太のばあちゃん、莊太があんなこと言われても許せるなんて、寛大だなあ。

「あのような子供、中山家の跡継ぎにするつもりなど、髪の毛ほども御座いませんでしたから。」

老婆の高笑いが聞こえた。

何言ってるんだ、このばあさん？

莊太は、あんなに頑張っているのに、何言ってるんだ、このばあさん？

莊太は本当に頑張っている奴で、莊太は、本当にすごい奴で、莊太は本当にいい奴なのに、何言ってるんだ、このばあさん！

怒りが抑えられなくなった俺は、ベンチから立ち上がった。

同時に、隣にいる人物が立ち上がった。

……ん？

隣にいる、翠先生のほうを向いた。

同じようにこちらを見た翠先生と顔を見合わせる形になった。

先生、ここで怒っても、たぶん怪しまれるだけですよ！

って、俺も同じか。

冷静になった俺は、何だか脱力して元のベンチに腰かけた。

そして俺が座った時、隣の翠先生も座ったようだった。

またしても、行動がかぶった。

恐る恐る、翠先生のほうを横目でちらりと見ると、同じようにこちらを見た翠先生と目があって、たまらずに笑い出してしまった。

隣で翠先生も大爆笑している。

ふと、前方を見ると、二人の母親が、それぞれの娘を連れて、帰っていくところだった。

金髪で昔は暴走族でもやっていそうな雰囲気の母親が、おしとやか娘、栞を、黒髪で、清楚な感じの母親が、やんちゃ娘、絢佳を連れていた。

逆じゃないのか？

大丈夫なのか？

その頃、耳障りな高笑いをやめた莊太の祖母とその取り巻きのセ

レブ達も、公園の出口へと歩いて行っていた。

「先生、怒りにいかなくてよかったですか？」

俺は、翠先生の顔を覗き込んだ。

「笹岡君こそ！」

そして、二人でまた笑いあった。

『兄弟、オレ、またフラれた！』

遙か彼方で、一人取り残された鈴村が泣いていた。

何だか、今、いい雰囲気な気がする。

「翠先生、」

俺は、翠先生を覗き込んだその距離感のまままで翠先生に話しかけた。

何故かはわからないけれど、今なら言える、そんな気がした。

「何か月か前に、俺が、告白したの、覚えてます？」

「……。」

まさか、忘れてます？

「何で、」

先生が俺に問いかけた。

「何で、あの時、笹岡君は、好きって言ったの？」

「崇に言われたんです。」

「崇君に？」

「好き、の気持ちを伝えなかったの。自分は、今、を生きているから、今、の好きの気持ちを伝えたいんだって。」

黙ったままの先生に、俺は、さらに続けた。

「それ聞いて、思ったんです。過去も、未来も、関係ない、今の、自分の気持ちを伝えなきゃ、後悔するって。」

感じるDNA

突然の休日から、一夜明けた。

「おはよう！」

朝って、なんて清々しいんだろう！

「笹岡、おはよう！」

「Sasakoka、good morning！」

「おはよう！」

「おはよう、笹岡！」

「今日は、やけに元気だな。」

「庄太は、鋭い。」

「昨日、公園の方から聞こえてきた、鈴村の、『絶叫』と、何か関係があるのか？」

「……庄太は、本当に、鋭い。」

「笹岡が裏切り者ってことは、笹岡に彼女ができたんじゃないかと、俺はふんでいるんだが。」

「いや、まだ、彼女になつたわけでは……。」

あの後は、特に先生といい雰囲気になるでもなく、先生、さつさと帰っちゃったしな。

「へえ……。」

「……ん？」

「まだ？」

「……しまった！」

「相手は誰？」

「ボクたちが知っている人？」

『かわいい?』

『この中の誰か?』

『ハヤク、イワンカイ!』

ベビーたちが矢継ぎ早に質問を浴びせかけてくる中、
莊太が冷静に言った。

『あの、無駄に幸せそうな感じから考えると、十中八九、
翠先生だな。』

……恐ろしいほどに、莊太は、鋭い。

『へえ。』

『そうなんだ。』

『ボクの翠先生なのに。』

『美女と野獣だね。』

『笹岡、野獣。』

『笹岡、ケモノ。』

『ササオカ、ケダモノ!』

もう、何とでも言ってくれ。

『じゃあ、笹岡は、ささおかみどり、になるのか?』
飛躍しすぎだし、ならない。

『そうか、ささおかみどり、か。』

むしろ、その場合、笹岡翠になるのは、翠先生の方だ。

『ささおかみどり、かあ。』

『略してささみか。』

略すな!

『ささみー!』

『ささみー!』

『ささみ、ミルク!』

『ささみ、オムツ!』

しかも、定着した!

『ササミ?』

『…… chicken.』

『Oh, chicken!』

『笹岡、チキン!』

『ササオカ、チキンヤロウ!』

……最終的に、チキン野郎で落ち着いてしまった。

ふと、人が入ってきて、ベビーたちの注目は、俺から逸れた。

『写真の兄ちゃんだ!』

『写真の兄ちゃんだ!』

『シャシンノアニキ!』

ベビーたちが写真の兄ちゃんと呼んでいるのは、放射線技師のことだ。

たまに、写真の姉ちゃんの時もある。

放射線技師は、医師から依頼のあったベビーのレントゲン写真を撮りおえると、出口へと向かっていった。

出入り口のところ、機械を傍らに寄せた放射線技師は誰かに話しかけていた。

「近間先生つて、NICU当番サイクルに入ってたんですか? 医局長なの?」

「いや、いつもは入ってないんだけどね。今日は当番の人が急に体調を崩しちゃって。」

整形外科の局長の近間医師の声がした。

しばらくして、放射線技師は機械とともにNICUから出ていき、入れ替わりに近間医師が入ってきた。

その時だった。

『パパ！』

初めて梓が『パパ』と呼んだのは、いつもたくさん愛情を梓に注いでくれる父親ではなく、恐らく初対面であろう整形外科医だった。

『パパ！パパ！ねえ、パパなんでしょ！パパ！』

うちの病院は、不妊治療にも力を注いでいて、その一環として、特に有能な医師なんか精子バンクへの登録を勧めている。

この病院で指折りの名医である近間医師は、きつと、精子バンクへの登録を勧められているに違いない。

もしかすると、既に、登録しているかもしれない。

もしかしたら、近間医師は、梓の本当の……。

近間医師は、ベビーたちの診察をしていたが、今日の整形外科受診のベビーの中に、梓は含まれていなかった。

『パパ！パパ！そっちじゃないよ！私はここだよ！何で来てくれないの！ねえ、パパ！』

梓は泣き出してしまった。

梓を抱っこしてあやし始めた俺に一通り診察を終えた近間医師が気付いた。

ところが、こちらへ歩み寄ろうとした近間医師のPHSが鳴った。「はい、近間です。はい。……わかりました。今から行きます。」

近間医師は、俺に軽く会釈をして、立ち去って行った。

『パパ！パパ！何で行っちゃうの？パパ！ねえ、どうして？』

叫び続ける梓をあやすことしか俺にはできなかった。

面会時間が訪れた。

『ママー!』

『ママー!』

ベビーのママが多い中、時間を作ってきたらしい梓の父親がいた。

『ママ!ママ!抱っこ!』

今日も梓は、ママの隣にいる男性を『パパ』とは呼ばない。

そして、今日も父親は、優しく梓を抱っこしようとした。

『やめてよ!触らないで!』

ところが、父親が触れるか触れないかの瞬間に、梓は泣き出した。

『何で、オジサンが抱っこするのに、本当のパパが抱っこしてくれないの!』

「あず、今日はゴキゲンナメさんだねえ。」

泣いた原因が自分だと知ってか知らずか、父親は、めげずにそのまま抱っこして、あやそうとしていた。

それでも、梓の涙は止まらなかった。

『オジサンのせいで、あんたのせいで……あんたなんか、パパじゃない!』

完全に、八つ当たりだ。

『あんななんか嫌い!大っ嫌い!』

父親に、『声』が聞こえなくて、よかった。

とうとう泣き疲れて眠ってしまった梓を、父親は悲しい表情で見つめていた。

こんなに愛を注いでいるのに……。

こんなに一生懸命なのに……。

梓は、父親になつく気配がない。

それでもめげずに頑張る父親は、本当に、すごいと思う。

梓を見つめる父親の表情は悲しげだったが、その眼差しは暖かかった。

いつか、この暖かい眼差しが、梓の心に届く日が来ると、信じた

梓を思う父親のためにも。

梓自身のためにも。

面会時間が終わり、部屋に残っている大人は職員だけになった。梓はまだ、眠っている。

ふと、扉が開いて、誰かが入ってきた。

近間医師だ。

「こちら辺に、ボールペン落ちてなかったかい？」

「これですか？」

落とし物入れに入っていたボールペンを取り出した。

「そう、それぞれ、ありがとうね。」

近づいてくる近間医師。

近間先生。

先生は、精子バンクに登録していますか？

先生は、A B型ですか？

先生は、梓の本当の父親ですか？

先生は、梓を愛してくれますか？

たくさん質問が俺の中で浮かんでいた。

でも、俺が真実を知ったところで何の解決にもならない。

真実を知ったからといって、梓と近間医師は戸籍上他人のままだ。真実を知ったら、梓と父親の仲がどうにかなるわけでもない。

近間医師は、ボールペンを受け取ると、足早にNICUを後にした。

俺には、黙って見送ることしかできなかった。

『パパ……。』

梓が『寝言』でそう言った。

ごめんな、梓。

俺には、近間医師が梓の本当の父親か、確かめる勇気もなかったよ。

『ササオカ！チキンヤロウ！』

そうきたか！というか、サラさん？

『……ムニヤムニヤ。』

て、こっちも『寝言』かい！

『パパ』

『私が1なんだから！私が一番なのよ！』

『何で、私が3なのよ！ありえない！』

『2つて中途半端。中途半端すぎるわ！』

今日、三つ子が入院してきた。

女を三つ書いて姦しいとは、よく言ったものだ。

『でも、あんた、1つてことは、この中で一番最初に歳を取るのよ』

『！』

『何ですって！きーっ！』

『どっちにしても、あたしは中途半端じゃない！』

……歳を取るって言っても、数分の差だろうが。

『笹岡！ミルク！私が一番！』

『私よ！』

『私に決まってるじゃない！』

『オマエラ、ウルサイヨ！』

『何ですって！』

『何よ、外国人！』

『アメリカ人！』

『ダメレ、ニッポンジン！』

ちなみに、この部屋の中は、サラ以外全員日本人なのだが……。

『……。』

『……。』

『……。』

『ワタシ、ニホンゴヨクワカラナイアルヨ。』

……さっきまで、めっちゃ日本語話してましたよね？

三つ子に翻弄されているうちに、面会時間が訪れた。

インターホンが鳴った。

「川嶋です。」

今日は梓のところが一番乗りだ。

少しして、梓の父親が入ってきた。

……あれ？父親だけ？

「ママは？」

梓の発言を知ってか知らずか、父親は、梓に話しかけた。

「今日なあ、ママ、風邪ひいちゃって、あずにうつすといけないから、おうちで休んでるんだ。」

「ふーん、そうなんだ。」

梓は、近間医師の一件以来、父親に当たり散らすことはなかったが、相変わらず、その人を「パパ」とは呼んでいなかった。

再びインターホンが鳴った。

「山田です。」

今度は三つ子の両親が現れた。

「ママ！パパ！私と抱っこして！」

「私を抱っこして！」

「私でしょ！私を抱っこして！」

三人娘のうるささに拍車がかかった。

「わーい！ママ！大好き！やっぱり1が一番なのね！」

そういう問題ではないと思うが……。

『ちっ！パパ！あたしを抱っこして！』

『私に決まってるじゃない！あんた！どいてなさいよ！』
どくも何も、君たちのベッドはちゃんとわかれているぞ。

『わーい！パパ！大好き！やっぱり男の人は若い女の子が大好きなのね！』

そういう問題でもないと思うぞ。

『ねえ、パパ！ママ！2は中途半端だからダメなの？中途半端すぎるの？』

きつと、違うと思う。

うるささに磨きのかかった3人娘から離れ、静けさを求めてたどり着いたのは、莊太のところだった。

今日も、莊太の母親は来ていない。

来るはずがない。

だって、莊太のばあちゃんが、いつだったか、莊太の母親に外出を控えさせていると言っていたのを聞いたから。

あんなに近くまで来ていたのに。

もう一步踏み出せば会えるところまで来ていたのに。

『笹岡、気にすることはない。』

莊太は穏やかに言った。

『ちゃんと、わかっているから。』

俺は、莊太の顔を覗き込んだ。

莊太は俺の目を見つめた。

その目には、一点の曇りもなかった。

『父親が忙しいことも。』

莊太は、本当に、それでいいのか？

『弟が生まれるまでばあちゃんが母親の外出を許さないだろうこと

も。』

「ずっと耐えて待っている荘太に、こんなひどい仕打ちがあっ
ていいの？」

『俺は、弟が、無事に生まれれば、それでいいと思ってる。』
なあ、荘太。

お前を取り巻く環境は、何でこんなに厳しいんだろっな？
それならいつそ……。

ふと、顔を上げた。

梓がすやすやと眠っているのが見えた。

……父親の、腕の中で。

こうしていると、本当の親子にしか見えない。

『……んー、パパ。』

目を覚ました梓は、すごく驚いた様子で、父親を見上げた。

そして、その視線の先は、父親が、梓を見つめる優しい眼差しと
ぶつかった。

梓はもう、気付いているんだろう？

梓が『オジサン』と呼んでいるその人は、

誰よりも優しい眼差しを梓に向けて、

君のためにいっぱい抱っこの練習をして、

いつだって、君にたくさん溢れんばかりの愛情を注いでくれてい
ることに。

「面会時間の終了を告げる音楽が鳴り始めた。

名残惜しそうな顔をして、父親は梓をベッドに戻した。

『待つて！ねえ、待つて！』

梓がぐずりだし、父親は振り返った。

「帰る前に、もう一度だけ……。」

そして、そつとそう呟いて、父親は梓を抱っこした。
梓は、素直にぐずるのをやめ、父親を見つめた。

『あのね、あのね、』

父親には恐らく届いていないであろう『声』で、梓は父親に語りかけた。

『もう一度呼びたいの。』

『パパ、つて。』

一瞬、時が止まったかと思った。
それくらい、幸せなことだと思った。

『私、パパ、つて呼べて、すごく、幸せだったの。』

梓は、なおも嬉しそうに父親を見つめていた。

『明日も、明後日も、これからずっと、ずっと、呼びたいの。』

こんな日が、いつか来たらと願っていた。

『パパ。』

この『声』が、梓のパパに届いていたらどれほど幸せなことだろう？

『パパ、あのね、』

暖かい眼差しで顔を覗き込んでいるパパに、梓は言った。

『ホントは、パパの抱っこが、一番好きなの。』

梓のパパも、気付いただろう。

自分の想いがちゃんと伝わっていることに加って、梓が飛び切りの笑顔を見せたから。

血の繋がりはなくても、想いは伝わる。

ふと、俺は、傍らにいる荘太を見た。

荘太を抱き上げて、俺はボソツと呟いた。

「荘太、俺んちの子にでもなるか？」

『……………？』

『ナンデヤネン！』

サラ先生、荘太の代わりにツッコミン、ありがとうございます。

生まれる命と……

秋が深まり、冬が近づいてきている。

そう感じられるような、冷たい風が吹く、朝だった。

病院の入り口に停まった、一台の高級車。

その中から、見たことのある男性が、見たことのある妊婦に寄り添って出てきた。

『ねえ、ママ、もう、出ていい？もう、出ていい？』

いつも聞いている『声』に、よく似た『声』。

そうか。あいつの弟が……。

妊婦とその付き添いと違うところに向かって、俺は歩いて行って
いた。

その先は、いつもの俺の職場。

でも、いつもと違う感じがする。

何だか、胸騒ぎがする。

何かが、聞こえる気がする。

胸騒ぎは、気のせいではなく、だんだん強まっていった。

そして、俺は、胸騒ぎの正体に気付いた。

進行方向から、『悲鳴』が聞こえてきているのだ。

この『声』は、もしかして……。

いや、でも、まさかそんな……。

NICUに入った瞬間、俺の不安は、確信へと変わった。

莊太の容態が急変していた。

『わあああああつ！パパ！ママ！パパ！ママ！』

俺が莊太のもとへ来たときには、すでに医師たちによって心肺蘇生が始まっていた。

「ちっ、繋がらん。」

主任が腹立たしげに受話器を置いた。

「莊太君の両親ですか？」

主任がうなずいた。

病院の入り口で見た光景を思い出した俺は、翠先生のPHSに電話をかけた。

来るかどうかはわからない。

それでも、知らせないわけにはいかない。

『死にたくないよ、死にたくないよ！』

莊太の『悲鳴』は続いている。

『莊ちゃん、頑張つて！』

『Sota! Fight!』

ベビーたちも、一生懸命莊太を励ましている。

莊太！死ぬなよ！

生きて元気に退院しろよ！

『パパ！ママ！諦めたくないよ！』

『莊ちゃん、頑張つて！』

『莊ちゃん、死んじゃヤダ！』

そうだよ、莊太、莊太はいつだって、父親のことも母親のことも諦めないでいたじゃないか！

まだ諦めるなよ、なあ、パパのことも、ママのことも、大好きなんだろ？

心電図のモニターは最後の抵抗をするようなゆらゆらした波形を描いていた。

『パパ！ママ！一緒に生きていきたいよ！』

『莊ちゃん、頑張つてよ！』

『莊ちゃん！生きて！』

『莊ちゃん、あきらめちゃダメ！』

莊太の親はまだ来ない。

生まれてくる命が大切だということもわかる。

でも……。

莊太だつて、こんなに頑張っているのに、莊太の周りにこんな人がいるのに、莊太の心は今、独りぼっちだ。

ピンポーン。

インターホンの音がし……。

ピンポーンピンポーンピポピポピポピポピポピポピポピポピポピポピポ……。

誰だか知らないけど、インターホン鳴らしすぎです！

インターホン、壊れちゃいますから！

かろうじてインターホンが壊れる前に、その人物は中へと招き入れられた。

スタッフの制止に気付かずに莊太のもとへとダッシュしていった人物。

それは、朝にも見かけた、莊太の父親だつた。

『死にたくないよ！死にたくないよ！まだ生きていたいよ！』

「莊太！莊太！」

父親は莊太に駆け寄って、莊太の名前を一生懸命に呼んだ。

「莊太！」

そして、莊太の耳に顔を近づけ、大きな声で莊太を呼んだ。

その時だった。

「……パ……パ………？」

一瞬、『悲鳴』が止んだのを感じた。

中山莊太物語（前書き）

読んで字のごとく、莊太君が主人公のお話です。

中山荘太物語

ここは、トンネルの中だろうか？
果てしなく、暗い。

遙か彼方に点のように光が見えた気がしたが、そちらに向かおうとしても、すごい向かい風が吹いてくる。

でも、何となく、本能でわかる。

この向かい風に、流されてはいけない、と。

そして、向かい風に逆らいながら、俺は、今までの俺の短い短い人生を、思い出していた。

俺に、意識、とでも言うべきものが芽生えた頃にはすでに、俺の周りの環境は、ボロボロだった。

俺が、自分自身を、そして母親の存在を自覚した時には、母親の体はストレスでボロボロになっていたのだ。

母親が、おかあさま、と呼ぶ人間の言葉からは、悪意しか感じられなかった。

「こんなことも出来ないで、貴女は、中山家の嫁としての自覚はあるのですか？」

「中山家の嫁として、英語もできないのは恥です。家庭教師をつけさせますから、勉強なさい。」

「こんなもの、息子の口に合うはずがありません。本家からシェフをよこしますから、今すぐ、その粗末な食べ物処分しなさい。」

こんな具合に、おかあさま、は、母親を見下して、バカにして、嫌なことばかり言った。

そのせいで、俺の住環境は、最悪だった。

意識、が芽生え始めてから、時間の経過と共に、俺はだんだんと状況を掴めてきた。

俺の両親は、恋愛結婚、というやつらしく、おかあさま、すなわち俺の祖母は、それを快く思っていなかったこと。

つい先日亡くなった祖父の跡を継いで大会社の社長になった父親の仕事が膨大すぎて、家に帰ることすらままならない状況だと言うこと。

そして、それをいいことに、祖母が、母をいびり倒していること。しばらくして、母親が俺を宿していることが、判明した。

孫、という存在に気付けば、祖母も多少は嫌なことを言わなくなるんじゃないかと、そう思っていた。

だが、母親の妊娠が発覚しても、祖母の態度はあまり変わらなかった。

「貴女、そんな無茶をして、中山家の跡継ぎを宿しているという自覚はあるのですか？」

「当分、買い物は私がしてまいりますから、貴女は外出を控えなさい。」

「また、貴女はそんな粗末なものを食べて、お腹の子に響いたらどう責任を取るつもりなのですか？」

態度が変わらないどころか、祖母の小言は増えているようだった。でも、本当は、祖母は祖母なりに、母を、そして俺を気遣ったことだったんじゃないかと思う。

その気遣いは、母親には伝わらなかった。
初めは優しい言葉ばかりだった俺への語りかけは、日に日に愚痴が増えていった。

ねえ、お母さん、お願い。

どれだけでも、愚痴を聞くから。

たくさん、愚痴を言ってくれればいいから。

ため込まずに俺に吐き出してくれればいいから。

だから、お願い。

おばあちゃんを、嫌いにならないで。

ケンカ、しないで。

俺のささやかな願いは届くことなく、嫁姑の間に来た溝は深まっていくばかりだった。

おばあちゃん、お母さんにもっと優しい言葉をかけてあげて。

お母さん、おばあちゃんの言葉の裏側に潜む優しさに、気付いて

あげて。

お父さん、お母さんとおばあちゃんの危機に気付いてあげて。

俺が、なんとかしなきゃ。

俺は、早く大きくならなきゃ。

早く、大きくなりたかった。

早く、外に出たかった。

早く、大人になりたかった。

俺が、頑張るから。

お母さんも、お父さんも、おばあちゃんも、大好きだから。

俺は、皆を守りたい。

だから、早く、早く、早く……。

早く、お母さんのお腹の中から抜け出したら、早く大きくなって、皆を守れるかもしれない。

そう思った俺は、早々に、この空間から抜け出そうと試みた。ストレスでボロボロだった母親から抜け出すのは、難しくなかった。

そして、俺は、体重わずか430gで外へと飛び出した。

そこに待っていたのは、明るい未来ではなく、厳しい現実だった。

耳は辛うじて聞こえるけれど、目が見えない。

自分で呼吸ができない。

体温の調節もままならない。

たくさん機械に繋がれてようやく生きている自分。

皆を守りたいだって？

こんなナリで？

守られていて、それでも生きていくだけで精一杯なのに？

自分が情けなかった。

それでも、母を思い、父を思い、祖母を思った。

生きなければ……。

何が何でも生きてみせる。

俺が外に飛び出してから数日後、体調が回復したらしき母親が見舞いに来た。

機械に繋がれて、生かされているともいえる俺の姿を見た瞬間、母親は、泣き崩れた。

「ごめんね、ごめんね、ちゃんとお腹の中で育てあげられなくて、ごめんね……。」

お母さん、泣かないで。

お母さん、謝らないで。

俺が、早く生まれてきてしまったのは、お母さんのせいでも、おばあちゃんのせいでもないんだ。

俺が、それを望んでしまったから。

まだ、出るべきでないという本能の警告を無視したから。

俺は、絶対、元気になる。

元気になって、退院して、大きくなって、そうしたら、今度こそ、俺がみんなを守るから。

だからお母さんも、元気になって。

俺はまだ、言葉のしゃべり方がわからなかったから、母親にこの想いは伝えられなかったけれど、元気になることで、この気持ちが届くといいなと、そう思っていた。

初めに見舞いに来て以来、母親は一度も姿を見せなかった。

風の噂で、母親は、俺のことに責任を感じるあまり、心を病んでしまったと聞いた。

一方俺は、元気にならなければと焦るたびに体調が悪化して、なかなか退院できないでいた。

そんな状態が続く中、俺は、1歳の誕生日を迎えた。

父親が、見舞いに来た。

毎日、目が回るほど忙しいはずなのに来てくれた。

俺が、生まれてきた日のことを覚えていてくれた。

「莊太、もう一ついいお知らせがあるんだ！弟ができたんだ！」

ずっと、心配していたんだ。

俺のせいで、両親が別れさせられてしまっていたらって。

でも、その心配は要らなくなった。

だって、両親は、別れさせられていない。

その上に、弟ができた。

弟が、俺みたいにならずに元気に育ってくれば、嫁姑にできた溝も、埋まるかもしれない。

でも、同時に少し、寂しかった。

俺の存在は、必要ないんじゃないかって、思えたから。

そして今日。

遠くで弟の『声』がした。

『ママ、もう、出ていい？もう、出ていい？』

ちゃんと、我慢できたんだな。

俺と違って、ちゃんと、出てくるんだぞ。

少し、油断したのかもしれない。

体調も、よくなかったのかもしれない。

突然、目の前が真っ暗になって、突風が吹いてきた。

気付くと俺は、長く暗いトンネルの中で、向かい風に逆らっていた。

この風に、流されてはいけない。

俺にはまだ、やれていないことがいっぱいあるんだ。

俺は、まだ、弟の顔を見てない。

俺は、まだ、お母さんに元気な姿を見せてない。

俺は、まだ、自分の口で話していない。

この風に、流されてはいけない。
俺には、夢があるから。

俺は、家族と一緒に暮らしたい。
元気に家に帰って、お母さんと、お父さんと、おばあちゃんと、
弟と、一緒に暮らしたい。

この夢は叶わない夢じゃない。
叶えて見せるんだ、絶対に。

流されるもんか。

流されてたまるか。

俺はあきらめない。

生きることを。

皆で暮らす明るい未来を。

ふと、風がやんで声が出た。

「莊太！」

この声を、聞き間違えるはずがない。

『……パ……パ………？』

俺は前方に向かって走り出した。

それから少しして、また、突風。

流されないぞ。

俺は、流されない。

俺は、生きる。

それからしばらく向かい風に耐えていると、目の前に、光の筋が
見えた。

……これは？

この光が、俺を助けてくれるものなのか、俺を、天国、へと誘うものなのかはわからない。

でも、この匂いに、覚えがあった。

だから、怖くない。

きっと、大丈夫。

手を伸ばして光を追った。

もう少し、あと少し……。

この匂いが、だれの匂いか、俺は答えを知っている。

『……………ママ……………』

リセット

「お父さん、離れて！」

莊太に電気ショックが与えられた。

「生きたい、生きてたい！」

父親が莊太に話しかけたあの時以来、莊太の『悲鳴』は止んでいない。

電気ショックの後すぐに心臓マッサージが再開された。

莊太の心電図は、まだ、回復していない。

『生きたい！俺は、皆と生きたいんだ！』

心臓マッサージをしている医師の横から父親が莊太の肩を揺らした。

「莊太！莊太！頑張れ！死ぬなよ！ママも今、頑張ってるから！」
その目に涙をためながら、父親は一生懸命莊太を励ましていた。

「お父さん、離れて！」

父親は、莊太の肩から手を放して、一歩下がった。

その時、父親の手から莊太のベッドに何かが落ちた。

「あっ！」

「危ないです！」

慌てて俺が父親を制止した時に、またしても莊太に電気ショックが与えられた。

「さっきまで、妻のそばにいて汗を拭いてたんですけど、莊太に夢

中で、コレを握りしめていたことすら忘れてました。」「
父親が、苦笑いしながら、荘太のベッドに落としたハンカチを拾
おうとした。

ちょうどその時、荘太の手が動いて、ハンカチを握りしめた。

『…………ママ…………。』

『悲鳴』が、止まった。

その頃、分娩室では、一人の赤ちゃんが産声を上げていた。

『悲鳴』を上げるほどの危篤状態から奇跡の生還を果たし、もの
すごい回復力を見せつけた荘太は、無事、退院の日を迎えた。
同じ日に、母親と弟も退院だ。

インターホンの音がした。

「中山です。」

若い女性の声、きつと、荘太の母親だろう。

『おい、笹岡。』

荘太に呼ばれて振り返った。

『俺は、約束を守る。だから、ちゃんと、聞いてるよ。』
俺は、荘太を見てしっかり頷いた。

昨日、荘太は俺に一つ、約束をした。

「莊太！明日はいよいよ退院だな！お父さん、もう、楽しみで楽しみで……。」

昨日、面会時間終了5分前に、莊太の父親がスキップでもしそうなくらいのハイテンションで、NICUに訪れた。

長男の帰りを相応心待ちにしていたのだろう。

面会時間の終了の音楽が鳴り、父親は、帰り際にもう一度莊太を覗き込んだ。

「明日は、ママと、パパと、亮太の三人で迎えに行くからな！」

そういうと、ものすごく軽やかな足取りで父親は帰って行った。

ちなみに、亮太というのは、莊太の弟のことである。

そうか、母親が久しぶりに……。

『なあ、笹岡。』

莊太の父親が退室して、ベビーの家族が誰もいなくなったNICUで、莊太が話しかけてきた。

『明日、俺、母親に、自分の口で話しかけようと思う。』

機械の音しか聞こえないNICUで、莊太の『声』だけが心に響いてきた。

『だから、笹岡、見ててくれないか？俺が、自分の意志で、言葉を話す瞬間を。』

「なあ、もし……。」

『ん？なんだ？』

「いや、何でもない。」

俺は密かにある考えを抱いていた。

それは、莊太を引き取るということ。

血がつながっていないなくても、想いは伝わる。

ろくに面会にも来ず、そのくせ次の子供を作り、さらに、あんな祖母のいる家に帰ったら、莊太が可哀想だ。

それならいつそ……。

血のつながりなどなくても、愛する想いは伝わるのだから……。本気で俺はそう思っていた。

だが、先日、莊太が『悲鳴』を、上げたとき、莊太の、心の底からの『悲鳴』を聞いたとき、俺の考えは一気に、かき消された。

莊太は、一心に家族の幸せを願っていた。

莊太は、ずっと、家族と暮らす未来を待ち望んでいた。

俺ではダメなんだ。

待つて待つて、待ち望んだ家族じゃなきゃダメなんだ。

でも、それでも……。

そこにはあきらめの悪い俺がいた。

莊太のところに一番来ている父親は、常日頃から仕事で忙しい人物だから、そんなに莊太を構ってやれないだろう。

じゃあ、もし、母親が、莊太の事を愛せなかったら？

もし、祖母が莊太にきつく当たったら？

一生懸命家族と暮らす未来を心待ちにしていた莊太に、ひどすぎる仕打ちだと思わないか？

俺は、莊太が自分の口で話すその瞬間に賭けてみようと思った。

もし、母親が、喜ぶ様子を見せれば、俺は黙って身を引こう。

もし、母親が無反応だったら、拒絶するようだったら……。

俺は、何とんでもなく莊太を引き取るうと思った。

そこしかチャンスはないから。

『声』ではなく、自分の声で話したその瞬間、記憶はリセットさ

れるはずだから。

その時点から、俺と、ゼロから始めればいいのだから。

準備を整えた両親が、亮太を連れて入ってきた。

亮太を抱っこしている父親の後ろを、母親が不安そうに歩いていく。

亮太のベッドに近づくと、父親は立ち止まって、母親に先に行くように促した。

恐る恐る、亮太に近寄る母親。

『ねえねえ、あれ、誰？あれは、誰？』

亮太は、兄の亮太に興味津々だ。

『俺は、亮太。亮太の兄ちゃんだ。』

『ボクのお兄ちゃんなの？ボクにお兄ちゃんがいるんだ！お兄ちゃん！すっごく嬉しい！』

兄弟の『会話』がなされている間に、母親は、亮太のもとへとたどり着いていた。

そして、恐る恐る、亮太を覗き込んだ。

「……………亮太？」

亮太、俺は、ちゃんと聞いているから。

約束したよな？

「……………ママ。」

亮太がしゃべった！

しっかりと、母親を見つめて、「ママ」ってしゃべった！
俺はすかさず母親の様子をうかがった。

母親は、目からポロポロと涙を流していた。

「荘太！荘太！荘太が今、ママって言った！」

母親は、荘太の手を握りしめて言った。

「荘太、こんなに大きくなってたのね。今まで、荘太のところに行く勇気がなくてごめんね。」

母親は、涙ながらに荘太を抱き上げた。

「ママのこと、覚えていてくれて、ありがとう！荘太、大好きよ！
これからはずっと、ずっと一緒だからね。」

そうだ、これでいいんだ。

いや、これが最良の方法なんだ。

そう思いながらも胸が痛かった。

本当に、荘太とお別れなのだ。

『兄ちゃんばつか、ずるい！ボクも、ママの抱っこがいい！』

亮太がぐずり始めた。

今日くらい、譲ってやれよって、新生児にそれは、酷か。

『何甘ったれたこと言ってるのよ！』

『パパが抱っこしてくれてるからいいじゃない！』

『私たちなんて、パパとママが抱っこしても一人余るのよ！ワガママ言ってるんじゃないわよ、ボウヤ。』

たちまち亮太は、姦し三つ子の総攻撃に遭った。

亮太よ、来た時期が悪かったな。

少しの間ぼかんとしていた亮太は、

『ごめんなさい。』

と、素直に謝った。

でも、そのあと、小さな声で、『女の子コワイ女の子コワイ……』と呟いていたことは、俺しか知らないかもしれない。彼の心にトラウマができていないことを祈ろう。

『莊ちゃん、よかったね!』

『莊ちゃん、元気でね!』

『莊ちゃん、ありがとう!』

『ソウタ、アバヨ!』

ベビーたちが莊太に『声』をかけている。

だが、莊太はもう『声』を発しない。

あの瞬間に、「ママ」って言ったあの瞬間に、莊太は『声』を失った。

そして同時に、今までの記憶も失っただろう。

あの瞬間に、莊太の記憶はリセットされたんだ。

なあ、莊太。

莊太はきつと、ここでの記憶を忘れてしまっただろうね。

でも、俺は、覚えているから。

莊太が寂しかったことも。

莊太がそれでも諦めなかったことも。

だからこそ、俺は願うよ。

リセットされた記憶の空間に、楽しい思い出がたくさん作られることを。

これからの荘太の人生が、光り輝いていることを。

母親が、荘太を連れ帰ろうと、抱っこし直したその時だった。

ものすごい勢いで纈纈がやってきた。

「ごめん、荘太君！退院前の採血忘れてたから、今から採らせて！」
「イヤー……！」

～END～

リセット（後書き）

読んでくださった皆様、ありがとうございました。

まだまだ、至らない点が多々あると思います。

また、筆者自身は、NICUと密に接しているわけではないので、事実とは異なる部分も多々あるかと思えます。

この物語はフィクションですので、そこらへんは大目に見ていた
だけると幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2297q/>

こんにちは赤ちゃん

2011年9月13日15時05分発行